

葛西善藏論

高田 瑞穂

第一章 略歴

葛西善藏は、明治二十年（一八八七）一月十六日、青森県弘前市松本町に生まれた。父宇一郎、母ひさ、長男であったが姉が二人、後に一人弟が生まれた。父は米の仲買を業としていた。

善藏の生まれた翌二十一年、一家は北海道に移った。家業の揮わなかったことが、転居の理由であった。

二十四年に、一家は北海道より再び内地に帰り、約二ヶ月青森市に止まった後、北津軽郡五所河原町に居を定め

た。父は呉服反物の行商を始めた。それから三年を経た二十七年、南津軽郡碓ヶ関村に本籍を移した。この年の四月、善藏は碓ヶ関小学校に入学した。この村は、海拔一千米の高地で、温泉あり、前は平賀川に臨み、後に三笠山を控え、風光は見るべきであった。

二十九年三月、数え年十歳の善藏は、酒を持って友人と花見に出かけた。その留守中に祖母が没した。

三十年、父は、鉄道運送業に転じ、碓が関停車場前に移った。

三十三年、小学校を卒業した善藏は、初めて上京し、新聞売をし、夜学に通ったが、三十五年に帰郷した。足かけ

三年の苦学は失敗に終った。この年、母が病死した。母の没後彼は北海道に渡り、岩見沢で鉄道従業員となり、車掌を勤務した。又営林署に務めた。そして約二ケ年にして再び上京した。三十七年十八歳の時である。

三十八年九月、十九歳の善藏は、東洋大学に聴講生として、十二月まで聴講した。そして文学への興味を持ち始めた。

三十九年五月からも東洋大学聴講。八月、二百里もあつた行程を徒歩で帰郷した。当時の手記に左の語がある。

「旅なれや、旅なれや、五十年も旅、一日も旅、行き暮れてたふれふす処、わが宿にて、くたびれたる身には美も不味もなし。」

九月上京。既に二十歳となつた善藏であつた。

四十年東洋大学専科二年に編入されたが、出席せず、帰郷して又上京した。

四十一年、二十二歳の善藏は、この年の三月、彼の郷里に近い南津軽郡浪岡村の人平野弥亮の娘つる子と結婚し、今度は二人して上京した。そして同年四月、徳田秋声の門に入った。六月帰郷、九月上京、今度は早稲田大学英文科に聴講生として入学した。秋声が『早稲田文学』の編集者

相馬御風に紹介の労をとり、自然主義時代の作家たるためには外国語の習得の必要を訓示した結果である。この早稲田入学が、その後の善藏の生涯に大きく働いたのであつた。彼は、早稲田において新しい文学の友を得たのであつた。最初は、御風の家に出入していた光用^{みつもちぎよ}穆がたまたま同県人であつたことから親しみ、その光用を通じて舟木重雄、相馬泰三を知り、更に舟木と早大英文科の同級生だつた広津和郎、谷崎精二等と交り^{まじり}を結ぶにいたつた。後年の『奇跡』同人の最初のつながりがここに生じたのであつた。

四十二年五月、善藏は飄然として茨城県大洗に赴いた。

五月から十月まで、約半年を大洗の旅館に過ごした。彼の最初の放浪であつた。その動機の一つは、創作をしたいといふことであつたが、結局何も書けなかつた。その間、妻の父に何度か無心状を送つて金を取り寄せて、半年間を遊び暮した。妻つる子は、妊娠して実家に在つた。この五月から十月までの旅館生活の間に、善藏は妻の父弥亮宛に十一回の無心状を送つた。その第一回のもの全文を、『葛西善藏全集』第五卷から引く。昭和五年九月に改造社から刊行された全集の最後のこの書は書翰集で所々(除く)とある。この第五巻の刊行された時、善藏は数え年四十二歳で

あった。

「拝啓。其後は御無沙汰仕り居り御機嫌如何御消光被遊居候や伺ひ上候。降而私事過日來当地に参り居り、勉強に取いかゝり居候。一くぎり片付け次第、多分今月中にて帰京のつもりに有之候へ共、都合にて来月中も帰京せざるやも知れずと存居候。身體も達者にて何事もなく暮し居り候間乍憚御安心被下度候。扱つる儀は未だ出産に相成らず候や、最早かれこれ其時日と察せられ候、安産の程祈り居り候。何分宜敷御願申上候。

尚過日つる許まで御願申上置候通り、都合も有之候へば誠に恐入候へ共、今月二十五日頃迄に（除く）あとは毎月拾円宛御送金被下度御願申上候。

乱筆平に御免被下度、時節柄折角御自愛の程祈上候。右宜敷御願申上候。早々頓首。

茨城県大洗小林楼にて

善藏 拜

十二日

平野弥亮様

こういう善藏は、この年四十二年で数え年二十三歳、盛に手紙を書いたが、その中で無視出来ないもの一つは、

同郷の友光用穆宛のものである。その光用宛の九月二十七日付のもの全文を引くこととする。大洗小林楼から光用宛の便りである。

「暗い。雨はザア／＼雨戸をたゞいてゐる。地の呻りのやうに、波の音が籠って聞える。二三年前、行脚して雨にたゞられた鬼怒川べりの田舎道、松田山北あたりの悪路が想ひ出される。僕も二三日書いて見たい気が頻りに動く。やはり時候の故だ。勉強の出来なかつたのも気候のせいだ。これから、来春までには何か書き得るだらう。その間だけでも生活問題から離れてゐたい。目下考案中だ。それにつけても、早く帰京せねばならぬ。僕も實際帰らうと思へば幾度も帰られた筈だ。がやはりずるを極めてゐたのだらう。どん底といふ処まで迫つてゐなかつたのだらう。今日では余程怪しいものだが、だが僕もとう／＼長尻では大洗開關以来の僕で通るやうになつた。

何事も枝から枝の小鳥のやうに行き得ない僕の性格を思はずにはゐられない。けれど僕はそれに対して不満も満足も感じ得ない。斯うして大洗が僕の生涯から離れられない縁——追憶——を結んだものとすれば寧ろ安値に過ぎる。

酒も女も各種の耽溺も強い刺戟、最後の刺激、不安のど

ん底——文芸——に手をつけて見たいと言ふ不断の自我の要求に聲援を与えたものとすれば、僕には決して無意義でない。会つて女話でもしたくなつた。」

ここには、葛西の性格の一端が明らかに出てゐる。一種の太々しさである。なお義父への無心状と友人宛の手紙とを対比するとき、前者においては常に勉強の必要を説き、前途の方針を語り、丁重を極めてゐる点が際立つ。当然のことながら、そこにも太々しさがある。思うに、二十三歳の善藏は、早くも、多彩な夢に遊ぶ文学青年時代を過ぎて、人生に対する幻滅を感じてゐたかの如くである。結婚一年余にして早くも一子の父「哀しき父」となつていた善藏であつた。前途の暗さも、けわしさも、彼には予見されてゐたようである。そういう宿命に対する反抗の気持が、無茶な長逗留を彼に敢てせしめたという風にも考えられる。しかしそういう大洗の生活が、彼にもたらしたものは皆無ではなかつたことは先にもふれた。

この年十月に帰京して、市外下戸塚の後楽園に下宿した善藏が、二十三日、光用宛に送つた便りを、その全文を引く。

「昨夕君を訪つたのだ。均坊は昨晚から来て居る。君

の時間の都合が分らぬから、ならば君の方から来て貰ひたい。僕も早く会ひたい。

半ヶ年の放浪は何物をもたらさなかつた。僕にしては放浪其物が価値であつたと言へる丈だ。全く此度は命がけで自分を主張し実行したのだ。僕にも生涯二度と、斯んな事はあるまいと思はれる。これでも幸か不幸か亡ぼされるに至らなかつた。却而自分の運命を征服し得たやうな気もする。半ヶ年の放浪は、自分の周囲——運命との苦しい戦闘であつたのだ。帰京して君の端書も読み、友人の嘆声も聞いた。つくづく感ぜられる、文芸の前には自分は勿論、自分に附随した何物をも犠牲にしたいと——かきかけの七八十枚は昨日引割いて反古にした。上京に差迫つて書いた六七枚のスケッチもの、こればかりは纏めてあつたので其のまゝにして置く。見せられる程のものではないが見て貰はう。」

この年四十二年十一月、善藏は、牛込区津久土前町の石本館に宿をかえた。そして翌四十三年六月、鎌倉円覚寺松嶺院に転宿。その心情を、二十四歳の善藏は次のように告げている。五月二十三日付の光用宛の前半を引く。

「いよく、今月かぎり都門を去つて、極端な半僧生活に

は入るつもりだ。明日の事は明日の事として、一切から離れて習作に努力するつもりだ。国の方からもいろ／＼絶望的な事を言つて来てゐる。もう何うなつたつて構わん。悉くが破壊されたら、破壊されたつて好い。……」

「半僧生活」も結局うまく行かず、七月には、鎌倉山之内釜屋米店前に転居。六・三畳二軒続きの長屋の一つであった。

十一月、東京市外東大久保の借家に移つて、久しぶりで妻子を迎え、一家三人の生活が始まつた。一時彼の心にも平和が宿つた。十二月十日付の光用宛の便りの後半から引く。

「……實際僕の心は今の処甚しく餓えてゐない。冷たい刺激よりも寧ろ温い刺激に神経がふるえる。涙を誘はれることになる。強い刺激は今の処僕には用はない。小供を伴つて夕方散歩する時の淡い孤独感や、思索なき細君が不図した場合に自分の死期を口にしたりする、——其種の事を感味する丈に満足してゐる。そんなやうな心持で、ひどく自分を虐待することなしにスラ／＼と作をしたいものだ。自然の開發を待つ外ない。……」

未だ作品を売ることの出来ない善藏は、たちまちにして

経済的な行きづまりに直面しなくてはならなかつた。

四十四年五月、東大久保二七五に転居。

八月、妻と長男亮三をつれて、郷里青森県浪岡に帰国をしようとしたが、善藏は盛岡まで同行し、そこから単身東京に帰り、四谷区荒木町高野方に下宿。九月、麴町区山元町の東館に移つた。同月、郷里浪岡にて、長女きくえが生まれた。

四十五年・大正元年、二十六歳の善藏は、三月、牛込区弁天町稲葉館に、四月、同町の常盤館に、と転々と移動、経済的理由もあつたであろう。この年の春から計画された同人誌『奇蹟』の創刊されたのは九月のことであつた。同人は光用穆・舟木重雄・廣津和郎・谷崎精二等であつた。その創刊号に善藏の掲げた作品は、著名な「哀しき父」であつた。

この作品は、葛西歌麿の文名によつて発表されたが、葛西文学の個性が明らかである。ここで章を改めることとする。

第二章 「哀しき父」論考

先ず、この作品をめぐる光用宛の書簡の一節を引くこととする。明治天皇の逝去される直前の、七月二十五日付のものである。

「……創作をやらうと言ふ時になつて急の暑さにやられて此頃はひどく疲弊してゐる。けれども屹度書くつもり、書けるつもりだ。二十枚許りになるだらうがなんにしても精力の欠乏には閉口してゐる。……」

次は、八月十七日の光用宛の一節である。

「相馬君からの報告と重複になるだらうが、初号も今日でやうやくきまつた。明朝印刷へ廻す筈だ。……目次は斯うだ。——馬車10頁舟木。夜17廣津。金糸鳥の死7土居。日没11峯岸。哀しき父11葛西。——これだけの顔ぶれなんだ。問題をひき起すやうな作が一つでもあればいゝのだが今のところではそれもまた無理な注文だ。追々の発展を待つほか仕方がない。……僕の作も精々五六点のところだらう。書けずにくゝゐて、ゆうべ徹夜をしてやうく間に合わされたのだ。今度は追ひくゝいゝものを書かう。……」

同じく光用宛の、八月二十一日の便りの一節を引く。

「……初号では多少作らしいものは舟木君の存在丈と云ふのだから実際に悲観に墮へないのだ。僕のは素質としては自信があるけれども、なんにしても完成されたものでないから、もう少しさきへ行かぬと今の批評家などには顧みもされないうだらう。兎に角にみんなはこれからだ。……」

以上を通じて明らかなことは、善藏が「哀しき父」を書いたのは、八月十六日の夜、一夜のうちであつたということと、未完成ではあるが、「素質としては自信がある」という考え方をしていたことである。この自己の「素質」への考え方は、その後の進路を併せ考えると、かなり正確なものであつたことが考えられる。

先ずこの作の冒頭一を引こう。全六章中の第一章である。少し長い引用となるが敢えてする。

「彼はまたいつとなくだんくゝと場末へ追ひ込まれてゐた。

四月の末であつた。空にはもや／＼と霧のやうな雲がつまつて、日光がチカ／＼桜の青葉に降りそゞいで、雀の子がヂュク／＼啼きくさつてゐた。(略)

彼は疲れて、青い顔をして、眼色は病んだ獣のやうに鈍く光つている。不眠の夜が続く。ぢつとしてゐても動悸がひどく感じられて鎮めようとすると、尚ほ襲はれたやうに激しくなつて行くのであつた。

今度の下宿は、小官吏の後家さんでもあらうと思はれる四十五六の上さんが、ゐなか者の女中相手につましくやつてゐるのであつた。樹木の多い場末の、軒の低い平家建の薄暮くじめじめした小さな家であつた。彼の所有物と云つては、夜具と、机と、何にもはひつてない桐の小箆筒だけである。(略)

彼は剥げた一閑張の小机を、竹垣ごしに狭い通りに向いた窓際に据ゑた。その低い、朽つて白く黴の生えた窓庇とすれ／＼に、育ちのわるい梧桐がひよ／＼と植つてゐる。そして黒い毛蟲がひとつ、毎日その幹をはひ下りたり、まだ延び切らない葉裏を歩いたりしてゐるのであつたが、孤独な引込み勝な彼はいつかその毛蟲に注意させられるやうになつてゐた。そして常にこまかい物事に対してもある宿命的な暗示をおもふことに慣らされて居る彼には、その毛蟲の動静で自然と天候の変化が予想されるやうに思はれて行くのであつた。

孤独な彼の生活はどこへ行つても変りなく、淋しく、なやましくあつた。そしてまた彼はひとりの哀しき父なのであつた。哀しき父——彼は斯う自分を呼んでゐる。」

「哀しき父」は、「彼はまたいつとなくだん／＼と場末へ追ひ込まれてゐた。」といふことばに始まる。冒頭のこの一文は、なかなか上手である。一人の詩人の生涯と運命とが、既にここにかなり印象的に暗示されている。「今度の下宿」の簡潔な描写、殊に「彼は剥げた一閑張の小机を」から「哀しき父——彼は斯う自分を呼んでゐる。」までの部分は、一篇の主題の最初の提示であるが、そこに色濃く流れる抒情の清澄さは注目に値する。この作が「彼は静かに詩作を続けようとしてゐる。」といふことはで結ばれてゐることも考え合わされる。私は後年の佐藤春夫の「田園の憂鬱」(大正八)の一節を連想、詩的抒情の清澄さにおいて、その先駆と見ていいであらう。「孤独な彼の生活はどこへ行つても変りなく、淋しく、なやましくあつた。」さながらに春夫調である。もう一つ連想されるのは谷崎潤一郎の「異端者の悲しみ」(大正六)である。「哀しき父」も「異端者の悲しみ」も、同様に、自らの資質発見の試みに他ならなかつた。そこから、「子供と金魚」への連がりの

生ずるのも自然のことであつた。第三章から引く。

「彼は都会から、生活から、朋友から、あらゆる色彩、あらゆる音楽、その種のすべてから執拗に自己を封じて、どつと自分の小さな世界に黙想してゐるやうな冷たい暗い詩人なのであつた。金魚を見ることは、彼の小さな世界へ焼鑊をさし入れるものであらねばならない。(略)どこかの場末の町の木蔭に荷を下し休んでゐた金魚売を見た時の、その最初の感傷を忘れることが出来ない。……」

これは注目すべき自己省察である。「小さな世界」とは、こういう詩人に本来の世界であつた。この詩人は、意志により、努力によつてこの「小さな世界」と同じものではない。「執拗に」ということは、一面、意志的なひびきを持つことも否定できないけれども、他面、より大きく個性的、性格的なものをひびかせている。かくしてこの詩人は、「小さな世界」に住むべき存在となる。そしてその自己に本来の「小さな世界」の存在に、「焼鑊」をさし入れることによつて、その世界の存在を際立たしめるものとして「金魚」がとりあげられる。つまり「金魚」とは、「小さな世界」の逆説的証明者に他ならなかつたのである。この「冷たい暗い詩人」は、「自分の小さな世界」に住むこ

とを運命とした詩人だったのである。この点への理解の有無が、この作品の評価を大きく左右する。この事情を別のことはでくりかえそう。

この詩人の孤独が、現実的には、経済的なものによつて余儀なくされたものであることは、否定できないであらう。親子三人が、郊外に住むという「静かな生活」を破つたものは、明らかに経済的圧迫であつた。換言すれば、「彼の経済的な無能力が、そういう「静かな生活」を離散せしめたのである。しかし、実はそれこそが、彼が彼の本来の生にもどつたことでもあつたのである。だからこそ「彼等の運命は一日一日と迫つて來てゐる。」(第二章)と記されてゐるのである。ここに作者の感傷を見るか、作者の宿命を見るか、それがこの作の評価の分れ途である。しかし、作品に即して言えば、それは必ずしも感傷ではない。生活の資をかせがなければ、子供——「唯一の友であり兄弟であつた。」(第二章)——子供と一緒の生活が出来ないといふことは充分予測されていながら、何一つ生活の資を得るための努力をしないのである。彼は、実は努力しないのではなく、努力出来ないのであつた。彼に出来ることは、精々、不安に堪えつつ「子供の為めの日課」(第二章)を続けることとし

かなかつた。結局、他人の金を、返済の当てもなく借り続けることしか出来ない葛西であつた。我々はそこに、一種の「性格破産者」——後に広津和郎によって様々に描かれる——を見るであろう。運命とは、人力をもって如何ともしたいから運命なのである。運命を負うものの心は、だから常に不安であり、憂鬱である。しかし、この詩人は、自らの運命が如何なるものであるかをほぼ洞察し得ている。その運命が、一つのうねりとなって落ちかかる時、彼は痛切に哀しまなければならなかつた。それにもかかわらず、彼は運命を待ちのぞんだのである。自分の「小さな世界」の確立のために。そこに「哀しみ」の本質があつた。

「しなしなと泳ぐ金魚」、いたずらに花やいだ金魚の姿は、その「小さな世界」を逆光の中に浮き上らせたのである。

こういう本来「小さな世界」に住むべき「冷たい暗い詩人」の前に、様々な冷たく暗い人間像の展開されたことは、何の不審もないであろう。詩人の宿命の目には、そういう人間像だけが映つたからである。腸の閉鎖と悪性の梅毒であつて死んでいった予備士官、「細君の暗い咳音もまじつて、一晚中コソコソと語りあかしてゐる」夫婦、そして、彼自身の咳血。一つとして暗くないものはない。

一切は、彼の孤独な心が呼び求めた人間達であつた。

そういう暗さの中に在つて、しかもそのどん底に落ちた瞬間に在つて、詩人の心にひらめくものは、やはり、光への空想であつた。それは何一つ現実化される望みのない点において、そしてそのことを十二分に彼が知つていたという点において、二重の空想であつた。暗の底における如上の光への空想において、彼に瞬間の救いを与えたものは、自然と子供とであつた。子供は自然人であつた。光に寄せる二重の空想が、瞬間においても現実的な力となるところに、悲惨な、倒錯的な「ユーモア」が生れたりした。第四章の結末に近い一部を引く。

「……彼の子供は裸体になつていた。ムク／＼と堅く肥え太つて、腹部が健康さうにゆるやかな線に波立つてゐる。そして彼にはいつか二三人の弟妹が出来てゐるのであつた。室は広くあけ放してあつて、(略)そこには子供の祖父も、祖母も弟妹もあるのだが、みんなゴロ／＼と寝ころんでゐる。唯彼ひとり、ムク／＼と堅く肥え太つて、ゆるやかに張つたお腹を突き出して、非常に意張つた姿勢をして、手を振つて大股に室の中を歩いてゐるのであつた。ふと、ペラ／＼な黒紋付を着た若い男がはひつて来て、

坐つて何か言つているやうであつた。すると子供は歩くのを止めて、ちよつと突立つて、

『さうか。それではお前はおれの抱へ医者になるか——』斯う、万事を呑んでゐるやうな鷹揚な態度で云ふのであつた。それを傍から見ても父は、わが子のその態度やもの云ひぶりに、覺えず微笑させられたのである。……

それが夢なのである。彼には幾日かその夢の場の印象はつきりと浮かべられてゐた。それは非常に大きなニューモアのやうにも考へられるのである。』

何と悲しく、滑稽なことか。そういう子供を「大きな黴菌」と告げていることも注目に価するので、第五章後半の部分を引く。

「彼の胸にも霧のやうな冷たい悲哀が満ち溢れてゐる。執着と云ふことの際限もないと云ふこと、世の中にはいかに氣に入らぬことの多いかといふこと、暗い宿命の影のやうに何処まで避けてもつき纏うて来る生活と云ふこと、また大きな黴菌のやうに彼の心に喰ひ入らうとし、もう喰ひ入つてゐる子供と云ふこと、さう云ふことどもが、流れる霧のやうに冷たい悲哀を彼の疲れた胸に吹きこむのであつた。彼は幾度か子供の許に帰らうと、心が動いた。彼は最

も高い貴族の心を持つて、最も元始の生活を送つて、眞実なる子供の友となり、兄弟となり、教育者となりたいとも思ふのであつた。

けれども偉大なる子は、決して直接の父を要しないであらう。彼は寧ろどこまでも自分の道を求めて、追うて、やがて斃るべきである。そしてまた彼の子供もやがては彼の年代に達するであらう、さうして彼の死から沢山の眞実を学び得るであらう——」

彼が子供について「大きな黴菌のやうに」と言つていることも注目に価しよう。子供は父親の「小さな世界」とは無縁の存在なのであつた。こう見てくると、「哀しき父」とは、現世の幸福に背を向けて生きるべく宿命づけられた一詩人の宿命の自覚と言つていいであらう。

最後に、結末の章第六章の結末、全文の結末の部分を引いて、錯雜したこの章を終ることとする。

「熱は三十七八度の辺を昇降している。堪へ難いことではない。

『自分もこれでライフの洗礼も済んだが、これからは少しおとなになるだらう……』

孤独な彼は、氣まゝに寝たり起きたりしてゐる。そして

いつか、育ちのわるい梧桐の葉も延び切つて、黒い毛虫も見えなくなつてゐる。彼の使つた氷嚢はカラになつて壁にかゝつてゐる。窓際の小机の上には、数疋の金魚がガラスの鉢にしな／＼泳いでゐる。

彼は静かに詩作を続けやうとしてゐる。」

第三章 文壇登場の風貌

葛西善藏を同人の一人として『奇蹟』の創刊されたのは、先に記した通り、大正元年九月、それが廃刊されたのは、大正二年五月、部数は全九冊であつた。その『奇蹟』に善藏の掲げたものは、次の諸作であつた。

「哀しき父」 大正一・九

「悪魔」 大正一・二二

「池の女」 大正二・二二

「メケ鳥」↓「泥沼」(改題) 大正二・四

これ等の諸作を以てしては、未だ善藏は作家として文壇に登つてゐるのではなかつた。そういう善藏の文壇登場の大きな契機となつたのは、大正七年三月『早稲田文学』に掲げた「子をつれて」であつた。翌大正八年三月新潮社よ

り刊行された最初の作品集の書名が、「子をつれて」であつたことも無視出来ない。そこで先ず、この作品にふれることとする。

「掃除をしたり、お菜を煮たり、糖味噌を出したりして、子供等に晩飯を済ませ、彼はやうやく西日の引いた縁側近くへお膳を据ゑて、淋しい気持で晩酌の盃を嘗めてゐた。」冒頭のこの一文は、全篇の暗示を内にふくんで静かである。「哀しき父」の冒頭によく似ている。

この作の発表された七年三月、善藏は、牛込区天神町の家を追い出されて、牛込区喜久井町の信濃館に移つたのであつた。その事実が、この「子をつれて」の素材であつた。右の冒頭に続けて、そのことを明らかに告げている善藏であつた。その冒頭に続くところも引用することとする。この年善藏は、数えて三十三歳であつた。四十二歳で没した善藏にとつては、晩年への近接であつたであらう。先の引用に続く所を引く。

「……盃を嘗めてゐた。すると御免とも云はずに表の格子戸をさうつと開けて、例の立退き請求の三百が、玄關の開いてた障子の間から、ぬうつと顔を突出した。」

小説家の小田(葛西)は、數金切れと、滞納四か月の状態

であった。だから立ち退きを強いられるのも当然であった。そういう状態における小田と三百との会話を引くこととする。会話の間の記述は省略する。

「……甚だ恐縮な訳ですが、妻も留守のことで、それも三四日中には屹度帰ることになつて居るのですから、どうかこの十五日まで御猶豫願いたいのですが、……」

「出来ませんな、断じて出来るこつちやありません！」

「さうですか。わかりました。わかりました。好ごさいます、それでは十日には屹度越すことにしますから」

「私もそりや、最初から貴方を車夫馬丁同様の人物と考へたんだと、そりやどんな強い手段も用ゐたのです。がまさかさうとは考へなかつたもんだから、相当の人格を有して居られる方だろうと信じて、これだけ緩慢に貴方の云ひなりになつて延期もして来たやうな訳ですから、この上は一歩も仮借する段ではありません。如何なる処分を受けても苦しくないと云ふ貴方の証言通り、私の方では直ぐにも実行しますから」

「まあ、それでは十日の晩には屹度引払ふことにしますから」

こういう小田と三百との会話が終つて三百の帰つた後に

次のような記述がくる。

「……実に変な奴だねえ、さうぢや無い？」

やう／＼三百の帰つた後で、彼の傍で聴いてゐた長男と顔を見交して苦笑しながら云つた。

『……さう、変な奴』

子供も同じやうに悲しきやうな苦笑を浮べて云つた。……」

小田（葛西）に見こまれたKは、恐らく「奇病患者」中のKと同じで、谷崎精二によれば、同人の一人相馬泰三である。

葛西の全集第五巻書翰集に収められた義父・妻の父宛の数十通の手紙は、殆ど総てが無心状である。その一端には既にふれた。実生活のための行動に、あれほど怠惰であつた葛西が、ただ無心状を書くことに関しては如何に勤勉であつたか。これは笑つてすませられる問題ではない。むしろ葛西の人間性を告げ、葛西文学を解くための有力なデータたるものである。したがつて、このことには今後もふれることとする。

「葛西は友人の金を借りて、それが返せなくなると、屹度相手の友人と喧嘩してしまふ。」こう告げているのも谷崎精二である。そういう葛西が、舟木重雄宛の手紙の一節でこう言っている。

「僕は君が君の如き生活を押し進めながら、尚直接に關係ないと思はれる事柄や、種々の人間に対して、寛大な心をもち得る性格に尊敬を持ち得るけれども同時に反感も感ぜられる。」(大正四年十二月二十四日)

親友尾崎は語る。「……さうした点で葛西は徹底したエゴイストであつた。自己の芸術のために身辺の何者をも犠牲にして厭はない意気込が茲にも認められる。」果してそうであろうか。「子をつれて」に關してこの点を考えたい。少し長い引用を敢てする。

「この三四ヶ月程の間に、彼は三四の友人から、五円程宛金を借り散らして、それが返せなかつたので、すべてさういふ友人の方からは小田といふ人間は封じられて了つて、最後にKひとりが残された彼の友人であつた。で『小田は十錢持つと、渋谷へばかし行つてゐるそうぢやないか』友人達は斯う云つて蔭で笑つてゐた。晩の米が無いから、明日の朝食、べる物が無いから——と云つては、その度に五十錢一円と強請つて来た。Kは小言を並べながらも、金の無い時には古本や古着古靴などまで持たして寄越した。彼は帰つて来て、『そうらお土産……』と、赤い顔する細君の前へ押遣るのであつた。(何処からか、救ひのお

使者^{つかひ}がありさうなものだ。自分は大した贅沢な生活を望んで居るのではない、大した欲望を抱いて居るのではない、月に三十五円もあれば自分等家族五人が饑えずに暮して行けるのである。たつたこれだけの金を器用に儲けれないといふ自分の低能も度し難いものだが、併したつたこれだけの金だから何処からかひとりで出て来てもよささうな気がする) 彼にはよくこんなことが空想されたが、併しこの何ヶ月は、それが何処からも出ては来なかつた。何処も彼処も封じられて了つた。一日一日と困つて行つた。蒲団が無くなり、火鉢が無くなり、机が無くなつた。自滅だ——終ひには斯う彼も絶望して自分に云つた。

電燈屋、新聞屋、そばや、洋食屋、町内のつきあひ——いろんなものがやつて来る。室の中に落着いて坐つてることが出来ない。夜も晩酌が無くては眠れない。頭が痛んでふら／＼する。胸はいつでもどきん／＼してゐる。……と云つて彼は何処へも訪ねて行くことが出来ないのです、やはり十錢持つと、Kの渋谷の下宿へ押かけて行くほかなかつた。」

「空想された」ということはで語られている心情は、葛西にとって一つの本音であると私は見る。ここでデータを

一応整理しよう。

一、子を捨てたる悲しみには堪え得ても、世間で働く苦しみには堪え得られぬ——「奇妙な論理」

二、実生活のために働くことには怠惰を極めつつ、無心状だけはせつせと書く——これも「奇妙な論理」

三、月三十五円を稼ぎ得ぬ自分を改めるよりは救いの使者がありそうなものと考え——これも「奇妙な論理」

こういう「奇妙な論理」の底には明らかに葛西にぬぎがたい、葛西その人の論理ないし心情の流れがくみとられるではないか。もう一つ引用しつつその底流をつかむこととする。Kを訪ねた葛西の分身、その二人の対話である。

『……そりやね、今日の処は一元差上げることは差上げますがね。併しこの一元金あつた処で、明日一日凌げば無くなる。……後をどうするかね？ 僕だつて金持といふ訳ではないんだからね、そうは続かないしね。一体君はどうご自分の生活といふものを考へて居るのか、僕にはさつぱり見当が付かない』

『僕にも解らない……』

『君にも解らないぢや、仕様が無いね。で一体君は、さうしてゐて些とも怖いと思ふことはないかね？』

『そりや怖いよ。何も彼も怖いよ。そして頭が痛くなる、漠然とした恐怖——そしてどうしていゝのか、どう自分の生活といふものを考へていゝのか、どう自分の心持を取直せばいゝのか、さつぱり見当が付かないのだよ』

『フン、どうして君はさうかな。些とも漠然とした恐怖なんかぢやないんだよ。明瞭な恐怖なんぢやないか。恐ろしい事実なんだよ。最も明瞭にして恐ろしい事実なんだよ。それが君に解らないといふのは僕にはどうも不思議でならん』

Kは斯う云つて、口を嚙んで了ふ。彼もこれ以上Kに追求されては、ほんとうは泣き出すほかないと云つたやうな顔付になる。彼にはまだ本当に、Kのいふその恐ろしいものゝ本体といふものが解らないのだ。がその本体の前にぢり／＼引摺り込まれて行く、泥沼に脚を取られたやうに刻々と陥没しつゝある——そのことだけは解つてゐる。けれどもすつかり陥没し切るまでには、案外時がかゝるものかも知れないし、またその事にどんな思ひがけない救ひの手が出て来るかも知れないのだし、また福運といふ程ではなくも、どうかして自分等家族五人が饑えずに生きて行けるやうな新しい道が見出せないとも限らないではないか？

——無気力な彼の考へ方としては、結局またこんな処へ落ちて来るといふことは寧ろ自然なことであらねばならなかつた。」

こういう論理は、如何にも虫のいい、幼稚な論理である。論理というには価しないものである。しかしこれはもう全く葛西の血となり肉となつたものである。だからこれは、全く具体的行為をとまなわぬ行為である。全く現実的なのである。同時にそれは、全体としてやはり空想なのである。この事情は恐らく、葛西自身以外の他人にはその正当性は理解されないにちがいない。それが自己の血肉であるといふことは、葛西にとつては自明の眞実であつた。ここに、葛西の生を方向づける一つの根本があつたのではなからうか。引用の結末において「無気力な彼の考へ方としては、結局またこんな処へ落ちて来るといふことは寧ろ自然なことであらねばならなかつた。」という時、この「無気力」は明らかに先の「空想」に連なる。「無気力」とは正にその「空想癖」ではなかつたであらうか。しかもこの「空想癖」こそは、実は、葛西その人のモラルに深くつながつていたものであつたことを、我々は知らざるを得ない。Kの「魔法使ひの婆さん」の話は、彼の「空想癖」と

切りはなしでは考えられないであらう。

「魔法使ひの婆さんがあつて、婆さんは方々からいろ／＼な種類の悪魔を生捕つて来ては、魔法でもつて悪魔の通力を奪つて了ふ。そして自分の家来にする。そして滅茶苦茶にコキ使ふ。厭なことばかりさせる。終ひにはさすがの悪魔も堪へ難くなつて、婆さんの処を逃げ出す。そして大きな石の下なぞに息を殺して隠れて居る。すると婆さんが捜しに来る。そして大きな石をあげて見る、——いやはや悪魔共が居るわ／＼、塊り合つてわな／＼ぶる／＼慄へてゐる。それをまた婆さんが引摺んで行つて、一層ひどくコキ使ふ。それでもどうしても云ふことを聴かない奴は、懲らしめの為め何千年とか何万年とかいふ間、何にも食はずに壁の中や巖の中へ魔法で封じ込めて置く……」

これがKの西蔵のお伽噺——恐らくはKの創作であらう——というものであつた。話上手のKから聴かされては、この噺は幾度聴かされても彼には面白かつた。

『何と云つて君はデタバタしたつて、所詮君といふ人はこの魔法使ひの婆さん見たいなものに見込まれてしまつてゐるんだからね、幾ら逃げ廻つたつて、そりや駄目なことさ、それよりも穩おとなく婆さんの手下になつて働くんだけ

ね。それに通力を抜かれて了つた悪魔なんて、ほんとに仕様が無いもんだからね。それも君ひとりだつたら、そりや壁の中でも巖の中でも封じ込まれていいだらうがね、細君や子供等まで巻添へまきぞへにしたんでは、そりや可哀相だよ』

『そんなもんかも知れんがな。併しその婆さんなんていふ奴、そりや厭な奴だからね』

『厭だつて仕方が無いよ。僕等は食はずにや居られんからな。それに厭だつて云ひ出す段になつたら、そりや君の方の婆さんばかりとは限らないよ』

「魔法使ひの婆さん」の魔法をのがれようと必死ににげまわる小田に対して、彼の同志たちがその非難を禁じ得ない理由も、実は、小田即葛西の「空想の真実」が彼等に理解出来なかつたからである。

「処が最近になつて、彼はKの処からも、封じられることになつた。それは、Kの友人達が、小田のやうな人間を補助するといふことはKの不道德だと云つて、Kを非難し始めたのであつた。

『小田のやうなのは、つまり悪疾患者見たいなもので、それもある篤志な医師などに取つては多少の興味ある活物いきものであるかも知れないが、吾々健全な一般人に取つては、寧

ろ有害無益の人間なのだ。そんな人間の存在を助けてゐるといふことは、社会生活といふ上から見て、正しく不道徳な行為であらねばならぬ』斯ういふのが彼等の一致した意見なのであつた。

『一体貧乏といふことは、決して不道徳なものではない。好い意味の貧乏といふものは、却て他人に謙遜な好い感じを与へるものだが、併し小田のはあれは全く無茶といふものだ。貧乏以上の状態だ。憎むべき生活だ。あの博大なドストエフスキーでさへ、貧乏といふことはいゝことだが、貧乏以上の生活といふものは呪ふべきものだ』と云つてゐる。それは神の偉大を以てしても救ふことが出来ないから……』斯うまた、彼等のうちの一人の、露西亜文学通が云つた。

こういう記述に続いて、いささかユーモラスな、しかし悲しいエピソードが記されている。全三章から成るこの作の第一章はそれで終る。この部分は、葛西の作品からの引用をもふくむ、谷崎精二の『放浪の作家』(昭和三十年十二月現代社刊行)の一部を引くこととする。長い引用となるが敢て行ふこととする。

「その頃筆者の母が死んで、『奇蹟』同人から連名で香奠

が贈られたが、葛西は手許不如意であつたため名前だけを連ねて金は出さなかつた。筆者は同人諸君へ『山本山』のお茶の罐詰を香奩返しに送つた。ところがどうした事情か、おそらく郵便局で何かに打ちつけたのであらう。葛西の処へ小包郵便で届いた罐は窪んでいびつになつてゐた。

彼は早速小包の糸を切るのもどかしい思ひで包装をはぎ、そしてそろそろ紙箱の蓋を開けたのだ。……新しいブリキ罐の快よい光！ 山本山と銘打つた紅いレッテルの美しさ！ 彼はその刹那に、非常な珍宝にでも接した時のやうに、軽い眩暈すら感じたのであつた。彼は手を付けたらば、手の汗でその快い光りが曇り、すぐにも錆が付きやしないかと恐るゝかのやうに、そうつと注意深く罐を引き出して見惚れたやうに眺め廻した。……と彼は、ハツとした態で、あぶなく罐を取落しさうにした。そして忽ち今までの嬉しげだつた顔が、急に悄け垂れた、苦いやうな悲しげな顔になつて、絶望的な太息を洩したのだつた。

それは、その新らしい快よい光輝を放つてゐる山本山正味百二十匁入りのブリキの罐に、レッテルの貼られた後ろの方に、大きな凹みが二箇所といふもの、出来てゐたのであつた。」

これは彼の出世作『子を連れて』の中で、主人公が友人 Y (即ち筆者) から贈られたお茶の罐を受取つたところの叙述である。主人公は、彼奴、金も出さないで名前だけ並べて不都合な奴だ。あんなやつにはいびつの罐でも贈つてやろうという意味で、Y が毎朝運動のために揮う鉄垂鈴でわざと罐をへこませて届けたのだと解釈して自分の貧乏がひどく悲しくなり、せめて家族にだけはそうした屈辱を知らせたくないと思つて、丁度その小包が届いた時家人が留守だったのを幸いに、台所から摺古木を持ち出して茶の罐の窪みを直した——小説にはそう書いてある。

「筆者はそれを読んで、何と云ふ奇抜な觀察をする男だらうと思つてふき出した。そして葛西に会つた時直ぐに云つた。

『お茶の罐の窪みを摺古木で直す所はとても面白いね。うまい思ひつきをしたものだね。』

筆者は無論葛西からそんな誤解を受けようとは思はなかつたので、彼が作品を面白くするために事実を曲解し、そうした空気を弄したのだとばかり推察して愉快に笑つたが、彼は『さうかい?』と答へたきり、不興気に黙り込んだ。

それから半年もたつた後だらう。或る時二人で矢來の通りを散歩してゐると、突然葛西は云つた。

『僕、君を誤解してゐて済まなかつた。いつかのお茶の罐ね。あれは君が僕を侮辱するつもりでわざと罐をへこませて届けたのだと思つてゐたが、その後いろいろ考へると僕の邪推だつた。今謝るよ。』

『何だ、あれは君、本当にそう思つてゐたのか？』

筆者彼の素直な告白をきいてあきれてしまつた。そして素直な葛西善藏にも案外な一面がある事を始めて知つた。その後によい／＼氣づいた事だが、實際葛西には被害妄想狂的なところがあつた。

葛西は、實際「被害妄想狂」なのか。それも言えよう。しかし、葛西の怒りのどこが妄想なのか……。彼の期待の純粹さが妄想であるはずはない。そして、彼の「ハツとした」こと、「苦いやうな悲しげな顔」、そして「絶望的な太息」も、もとより妄想であるはずはない。そうだとすると、そういう葛西を妄想者と呼ぶためには、どうしてもこの二つの事を結びつける結び方にその理由を求めるほかはあるまい。しかしそれとても「如何に猜疑心を逞うして考へてみても、まさかYが故意に……」という反省を忘れて

いない。そう考えてくると、谷崎や彼の仲間たちの葛西に注ぐ非難は、やはり葛西に固有の「空想癖」への無理解と言わざるを得ないであらう。しかも、「大きな凹み」を二つ持った罐を前にしての葛西の心情は、彼の期待の純粹さを主とした原因とする以上、当然葛西の倫理感につらならずにはいない。葛西の倫理感覚は決してにぶくもなければごつてもいいのである。たかが一つの茶の罐をめぐつても、それは無限に拡大されるほどセンシブルでもある。丁度、一つの玩具が子供を天国に導くことの出来るように。つまり葛西のモラルは、彼の空想癖と別ものではなかつたのであらう。その点を明らかにするために、私は一つ先走りをしてみよう。ここで、小林秀雄の「梶井基次郎と嘉村磯多」(昭和七年)から引く。

「葛西氏は世人のいふ性格上の弱点といふものを常人以上に持つてゐた人であらう。そういふ普通にいふ弱さが、氏の錯乱の因をなした事は言ふまでもあるまい、だが一層深刻な源がある。例をあげる。これは有名な話らしいが、岡田三郎氏のフランスへの旅立ちを鎌倉にゐた葛西氏が大船の停車場に見送る話を葛西氏は書いてゐる。氏が岡田氏の汽車をまちあぐむでゐると、汽車は急行でプラットフォーム

ームの氏を手もなく黙殺して通過して了ふ。折角僕に旅行するとハガキをくれておきながら、大船あたりで立つてやしないかと、人情としても乗車口までも姿を出すべきである。それだけの義理人情の解らないやうな人間だと思つたところなら、ハガキなど呉れぬがいい、出して置いて何うせあいつが出て来やしまいかと、忘れてゐるとすれば馬鹿だし、知つてゐて乗車口にも出ないとすれば、不謙遜ぢやないか、と氏は憤慨してをる。氏の文章はもつと誇張されたものであるが、氏の真意と見て少しも差支へない。まさしくこれは錯乱だが、又、プラットフォーム上の氏が、純潔な謙遜にかがやいてゐた事も間違ひだがかういふ純潔すぎる純潔は、世間で使ひこなす術がない。術もないのに氏は平気で使ひこなさうとして馬鹿をみる、而も相手に何の過誤もない以上、相手を詰ることは自分を詰る事と同じ意味である。己れの謙遜が己れの謙遜を詰るとは又、純潔すぎる純潔は倨傲の一形式にすぎぬといふ事と同じ意味である。かかる算術的に簡明な理屈を軽蔑するものは氏の勝手な信仰だが、氏が軽蔑するにせよ、しないにせよ、事態は又勝手にこの簡明な理屈通りに進行するのであつて、この逆説的純潔を信仰する氏には、これを樂しむが為に

『人となり、友親を絶す』と酒を呑むか、或ひはこれを実現することなく、飽くまでも人間的であつたが為に、これによる酒中の樂しみ或ひはこれによる芸術上の実現に正確に比例して、過誤のないこの世が氏の心を傷けたのである。ここに氏の悲調の源があるのだ。」

私は、この葛西論にもまさる葛西論を知らない。当然私の葛西論は、恐らくこの指摘の周りを右往左往するに止まるであらう。そういう小林のことはを考へる前に、この出来事についての葛西自身のことばにも一応ふれておこう。

大正十五年三月から昭和二年二月まで『不同調』に連載された葛西の「小感」第五回から引く。

「岡田君がフランスに行く前に、僕にもハガキを呉れた。ひどく懇篤丁寧な文句だつたと思ふ。その上に何月何日何時の急行で出發といふことも書いてあつたので、僕は丁度鎌倉の、あのどちらに出るにも不便な建長寺内にゐたのであつたが、東京駅まで見送りが出来ないから、大船駅までご挨拶だけにでも出ようと思つて、出不精の僕は、五時六時から起き出して、千里の外に友を送るといふやうな感じだつたもんだから、まさか斎戒沐浴はしなかつたけれども、さういつた気持ちで、大船駅のプラットフォームに

立つて永い時間待つてゐたのであるが、正宗得三郎さんと同じ汽車だつた筈だ。ところが、懇懇に僕が歩廊に、言ふべくんば直立不動の姿勢で、彼の汽車を迎へたのだが、尤も、駅員からこの汽車はこゝへは停車しませんと言はれてゐたので、特に注意して彼の一瞥を仰ぎ、彼の一言をきく、さうして別れたと思つて、さういつた場所に注意してゐたのであるが、その一二等客車は、窓かけをとり、つ放しで、スーツと通り過ぎてしまつたのである。確かにこの汽車に岡田君が居ると思つても、何うご挨拶のしようもないことであつた。普通だと直ぐの汽車で鎌倉まで乗るのだが、乗りたい気持ちもなくなつて、大船駅から建長寺まで、一里余りの道をしてく／＼と歩いて帰つた。折角僕にハガキをくれるぐらゐなら、普通の場合でないのであるから、東京駅までは出て来ないにしても、大船あたりで立つてやしないだらうかと、人情としても、窓掛けははづして見るか、乗車口までも姿を出すべきぢやないか。それだけの義理人情の解らないやうな人間だと思つたところなら、ハガキなど出さなければいゝ。出して置いてさ、何うせあいつが出て来やしないだらうつて、忘れてゐるとすれば馬鹿だし、知つとつて窓掛もはずさず、乗車口にも出て来な

いとすれば不謙遜じやないか、……」

葛西が建長寺内宝珠院に住んだのは、大正九年から十二年までである。小林のいう「純潔すぎる純潔」が無視され、ふみにじられ、またそうされたと感じ得られて、次第に「倨傲」の相をおびるにいたる心的経過は、ここに余すところなく語られているであらう。この一点において葛西の「悲調の源」を見出した小林の眼は、たしかに卓越したものであつたと思う。私はこの事情の一のヴァリアシオン（変形）として、葛西の「空想癖」を考えているのである。恐らく岡田三郎も、この葛西の憤りを知つた時には「あきれてしまつて」その果てに葛西という人間は「被害妄想狂的なところがある」と言つたかも知れない。そう言わないまでも、殆ど同じような感じを心に抱いたであらうことを想像してもそんなに見当ちがいはあるまい。小林はいわゆる「純潔すぎる純潔」とは、かくして、現実の世の中に置かれたときは、一の「勝手な信仰」とならずにはいらないと言う。その「勝手な信仰」を私は、別のことばで「空想癖」と言つたまでである。それが世間の常識にとつて、更には世の常の作家——作家は誰も多少とも常識的ではない——にとつても「あきれてしまふ」ほかはないものとしてしか映ら

なかつたわけである。葛西はかかる「空想癖」に呪われつゝ、孤独な運命を余儀なくされた作家だったのである。ここで本題「子をつれて」に帰ろう。

三百との約束の十日は、すぐにやつて来た。夜來の酒に酔いしれて、「ポロ毛布の上に着たなりで眠つて」、目をさまして、貸家をさがしに出かけようとしているところへ、三百が格子の外から声をかける。そういう三百とのやりとりを見よう。

『家も定ままつたでせうな？ 今日十日ですぜ。……御承知でせうな？』

『これから捜さうといふんですが、併し晩までに引越したらそれでいゝ訳なんでせう』

『そりや晩までゝ差支へありませんがね、併し余計なことを申しあげるやうですが、引越しはなるべく涼しいうちの方が好ありませんかね？』

『併し兎に角晩までには間違ひなく引越しますよ』

『でまた余計なことを云ふようですが、その為に私の方では如何なる御処分を受けても差支へないといふ証書を取つてあるのですから、今度間違ふと、直ぐにも処分しますから』

三百は念を押して帰つて去つた。」

この記述に続いて、今は警官をしている旧友横井の描写を経て、著名な結末に近い部分がくる。

「……………」

空行李、空葛籠、米櫃、釜、其他目ぼしい台所道具の一切を道具屋に売払つて、三百に押かけられないうちと思つて、家を締切つて八時近くに彼等は家を出た。彼は書きかけの原稿やペンやインキなど入れた木通あけびの籠を持ち、尋常二年生の彼の長男は書籍や学校道具を入れた鞆たもとを肩へかけて、袴はかまを穿はいていた。幾日も放はつたらかしてあつた七つになる長女の髪をいゝ加減に束ねてやつて、彼は手をひいて、三人は夜の賑かな人通りの繁はげしい街の方へと歩いて行つた。彼はひどく疲労を感じてゐた。そしてまだ晩飯を済ましてなかつたので、三人ともひどく空腹であつた。

で彼等は、電車の停留場近くのバーへ入つた。子供等には寿司をあてがひ、彼は酒を飲んだ。酒のほかには、今の彼に元氣を付けて呉れる何物もないやうな氣がされた。彼は貪るやうに、また非常に尊いものかのやうに、一杯々々味ひながら飲んだ。前の大きな鏡に映る蒼黒い、頬のこけた、眼の落凹おちこぼんだ自分の顔を、他人のものかのやうに放心

した気持で見遣りながら、彼は延びた頭髪を左の手で撫であげ、右の手に盃を動かしてゐた。そして何を考へることも、何を怖れるといふやうなことも、出来ない程疲れて居る気持から、無意味な深い溜息ばかりが出て来るやうな気がされてゐた。

『お父さん、僕エビフライ喰べようかな』

寿司を平らげてしまつた長男は、自分で読んで、斯う並んでいる彼に云つた。

『よし、……エビフライ……』

彼は給仕女の方に向いて、斯う機械的に叫んだ。

『お父さん、僕エダマメを喰べようかな』

しばらくすると長男はまた云つた。

『よし、エダマメ——それからお銚子……』

彼はやはり同じ調子で叫んだ。

やがて食ひ足つた子供等は外へ出て、鬼ごっこをし始めた。長女は時々扉のガラスに顔をつけて父の様子を視に來た。そして彼の飲んでゐるのを見て安心して、また笑ひながら兄と遊んでゐた。

この部分における描写の透明度は、結局、二人の子供と小田と、三人だけの世界における透明度である。途方にく

れ、行きつまつた空極において、小田とその子供たちが現じた一種の天国の描写と言つても言い過ぎではない。勿論それは、あるどんづまりの瞬間だけに、ホカッと現前した空想の世界なのである。だからそこではもう、子供たちは自然に「僕エビフライ喰べようかな」と言うことが出來、小田もそれに対して「よし、エビフライ——」と言うことができるのである。悲しい光景であるにはちがいないが、同時に、平和な光景でもあった。小田の疲労も、ここでは平和の保証として役立つかの如くである。

「時々扉のガラスに顔をつけて父の様子を視」「彼の飲んでゐるのを見て安心する」「子供たちの姿は、同時に「笑ひながら」遊んでいる子供たちを見て安心する小田の姿をも物語る。下界に下りた「聖家族」……。

「子をつれて」によって葛西の文名はあがり、一応文壇の人となることに成功したのであったが、この年大正七年中においては、この出世作の他には「兄と弟」（五月）を『大学及び大学生』に発表したに止まり、生活は全く困窮し、ついに、七月、妻子の後を追つて帰郷した。そして九月に「呪はれた手」を『秀才文壇』に、「遁走」を『新小

『説』に発表したのが、その「遁走」によって、彼の都落ちの姿を覗いてみることにする。

「私は平生から用意してあるモルヒネの頓服を飲んで、朝も昼も何も喰はずに寝てゐた。何と云ふ厭な、苦しい病氣だらう！ 晩になつてやう／＼発作のをさまつた処で、私は少しばかりの粥を喰べた。梅雨期の雨が、同じ調子で、降り続いてゐる。

私は起きて、押入れの中から、私の書いたものゝ載つてゐる古雑誌を引張り出して、私の分を切抜いて、妻が残して行つた針と木綿糸とで、一つ／＼綴り始めた。皆な集めても百頁には足りないのだ。これが私の、この六七年間の哀れな所得なのだ。その間に幾度、都会から郷里へ、郷里から都会へと、斯うした惨めな氣持で遁走し廻つたことだらう……（中略）私は例の切抜きと手帳と万年筆位の持出して、無断で下宿を出た。」

これが葛西の侘しい都落ちの姿であつた。

この年の夏、谷崎精二は、十和田探勝の目的で葛西の郷里を訪れた。『放浪の作家』の中には次のようなことが記されている。

「葛西は駅迄筆者を迎へに来てくれたが、同じ列車で降

りた小柄な婆さんと彼は何か話し合ひ、お婆さんはこそそそと立ち去つてしまつた。後で聞くと、それが葛西の継母だつた。（略）（宿に案内されて……）直ぐ二人は湯に入つて晩酌の膳に着いた。『先刻おふくろが君の事をいろ／＼聞いたから、有名な新進作家だと云つてほめておいたよ。さうしたら良い友達を持つて仕合せだが、お前は一体いつになつたら一人前になれるんだ。雲に取り残された籠かね、つてひやかされた。——おふくろは皮肉なんぞね。』

大正八年（三十三歳）、この年一月に、「泥沼」を『新小説』に発表。同月下旬、単身上京。市外青山北町の八千代館に下宿。

三月、第一創作集『子をつれて』が新潮社より出版され、大いに世評を呼んだ。

四月、「火傷」を『文章世界』に発表。

五月、「青い顔」を『新潮』に。

作家生活はやや順調を示していた。そういうこの月、信州別所温泉におもむき、九月まで滞在し、「馬糞石」を七月の『新小説』に、「不能者」を八月の『改造』にそれぞれ発表した。九月に帰京し、本郷区弓町西城館に移つた。その翌十月に、「新進作家叢書」の一として『不能者』を新

潮社より出版した。更に十一月には、「愚作者と嗷吠」を『新小説』に發表した。そうしたこの年大正八年の諸作の中、注目すべきものの第一は、力作「不能者」であつた。

「不能者」はこの年の諸作の中で最も長い力作で、参吉という主人公と、洋画家成瀬とが別所の芸者金彌をめぐつて恋の立て引きをする情況を描いた作品であるが、成瀬に對する参吉の憎悪が余りに強烈に出すぎていて、それがこの作に一種の歪みを与えてしまつてゐる。しかし、それではないの作で見ると、唯一は、参吉の憎悪に他ならないのである。その憎悪の由来を葛西は次のように記してゐる。

「金彌は彼に取つては、酒の相手としての美しい偶像なのである。それを、たつた二度目に會つた成瀬が、金と云ふもので、他に相手も無いではないのに、単に奪略の興味から、金彌の肉体を得ようと、参吉の前で露骨な態度を見せたのである。芸術家ではないか！ 何と云ふ淺ましい奴だ。美と礼讓に對する感情の痲痺した奴は厭だ。万事は金で片付くものと思つてゐるやうな芸術家ほど厭なものはない——と臆病な彼も、酔つてゐるので、怒つたのである。そしてまた、直覺的に、結局この金彌もまた、この猛者の

為に蹂躪せらるゝに違ひないと云ふ氣がして、彼はひどく悲しくなつたのである。」

参吉は、「美と禮讓」とをとつて、成瀬を嫌惡するのであるが、そういう参吉の心情は成瀬にはおよそ通じ難性質のものであつた。何故なら？ 先の引用に続く部分を引く。

「成瀬は都會で他の妻君を恋して、離婚騒ぎまでひきおこして、その傷手を負うて、このS州へ連れ來つたのであつた。そしてこの土地へ來る前ある温泉場では土地の芸者を片つばしから咽喉首を掻き切つてやつたことを、誇りとしてゐた。

『戀愛ですなあ。戀愛のほかには、この人生の單調を破る何ものも無いですよ。でなければ冒険——僕はこの夏は日本アルプスを踏破しようと思つてゐます』と、金に困らない彼は、眉をあげて、度々かう云つた。

参吉に取つてもまた、この人生が退屈であり、單調であるには違ひなかつた。しかし、この頃の彼には、金でかうした種類の女を漁り歩くと云ふことが、ひどく恥しいものに感じられてゐた。酒の勢ひで以てしても、斥けることが出来なかつた。それに彼はひどく貧乏であつた。彼は出来

ることならば自分が、『貧しき人々』のマカールであり、金彌がブルブーラであるやうなことを願つた。そして毎日々々、親愛なる私の何々さん——貴女の卑き召使ひの参吉より——と云つたやうな手紙を書くことすら、彼は空想した。

『これは驚いた。君はほんとにそんな風^{ふう}に考へてゐるのですか。こんな人達にそんなこと云つたつて、てんで分りやせんですよ。すべてが金のことですよ。こんな種類の女達ばかりでなく、すべて女は金にはまゐりますよ』と成瀬はゆうべも、女たちを前にして、憫笑した眼付を見せて参吉に云つた。

結局この男は、ほんとうに他の愛を所有したことも、所有された経験も無い人間に違ひないと、参吉はしまひには断定的にさう思つた。神経性な焦燥、肉体への突撃、略奪的傾向——すべてがそれを証拠立ててゐるやうに思はれた。参吉と成瀬の恋愛に対する觀念が、完全に背反してしまつていたのである。それにしても参吉の、田舎の温泉芸者に寄せる恋情の何と愛らしく、清らかであることか。——例の「空想癖」は、ここにも亦明瞭に影を落していると言つていいであらう。くだくだしいから筋を辿ることをさけ

るが、ここに葛西の面目丸出しといつていい田口参吉の手紙がある。送る相手は成瀬道夫である。全文を引く。

「御手紙を感謝します。ほんとに僕は恐縮せずにはゐられません。しかし正直に云ふと、やはり僕はさう信じてゐます。そうならなければならぬと、僕は人間として、また芸術家として、どこまでも信じて行きたいのです。そう云ふ意味から、僕を癡愚だと言はれても、僕は恥辱だと思ひたくありません。

僕に取つては、あの女たちは、すべて、美しい夢の中の女たちです。やはり『雪をんな』なのです。しかしたとへ『雪をんな』にしてもが、僕はその基調を、やはりほんとの人間、ほんとの靈魂の上に置きたいと、かんがへて居るのです。ましてや、僕にとつては、妻、母、姉妹、娘、それらはどうして直接の生命そのもので無い筈がありません。僕はいつの時だつて、かの女等を涙なしでは想ひ浮べることが出来ません！ かの女等に幸福あれよ！ 娑婆の悪党を避けよ！ 神の愛を信ぜよ！ 私はどうしてさう祈らずに居られるでせうか？ だもんだから、今までのあなたのやうな恋愛態度は、絶対の罪悪だと信じて居るのです。呪はれてあれよ！ 私はかう、あなたの人間そのもの

でなく、あなたのその態度を、ほんとに幾度心の中に繰返したことでせうか。私はあなたを、純情な、正直な人だと、信じてゐます。だから、私はその態度さへ改めて呉れよば、私はほんとうに心からお友達として握手出来ると思つてゐます。どうかこれまでの私の生意気な態度を許して下さい。そしてお友達になつて下さい。男でも、女でも、またあゝ云つた種類の女に対しても、心のお友達として求めようとして、求め得られない時の淋しさと云ふものを、敏感なあなたが、これまでの生涯に経験なさらなかつたとは、私には信じられないことです。どうか哀れな金彌を慰めてやつて下さい。かの女等こそ、ほんとに泣いてるぢやありませんか！ それがあなただけにお解りにならない筈がないと思ひます。それがもしわからないような芸術家だつたら、私はそんな人間の芸術を、決して信じようとは思ひません。私は繰返して云ひます。そんなものは芸術家でも何でも無い、娑婆の悪党です！ 成金どもの尻でもしやぶるがいい！

どうぞ金彌にもよろしく云つて下さい。僕は今、厭な仕事でまゐつてゐるところです。夕方お訪したいと思ひます。

成瀬道夫様

田口参吉

私は「不能者」を通じて、葛西における「空想癖」のあらわれの一つを見て来た。参吉の第一義的恋愛観がそこにさぐり当てられた。しかし、それと同時に、成瀬の描写のうち、あきらかにある誇張、そこから来る現実感の不足を見かけないわけには行かない。そしてこの両者は、確かにあるつりあいを保っている。その後者を見、そこに葛西における一の常套的手法を見るといふ見方も出来なくはないし、事実、それがかなり有力な葛西論を形成してもいい。特にそれは、ある意味での被害者たる彼の友人たちのほぼ一致した見解であつた。例えば、谷崎精二は言う。これも『放浪の作家』からの引用である。

「葛西の周囲の知人たちが彼の作品にモデルとして取入れられ、而かも実在の姿を彎曲され、畸形的な人物として嘲笑的、侮蔑的な取扱ひを受けてゐる事は周知の事実であるが、友人A、B、C、Dのありのままの姿は彼に興味が無いのだつた。それは唯倦怠を感じさせるだけで、現実を故意に歪めてみなければ、彼には満足出来ないのだつた。

山に對して動けと命じ、山が動かかなかつたので自分の方から動いて行かうと云つた古の聖者の様に、現実が冷靜不動である場合、葛西は自分の方から現実へ働きかけた。そして極く小さな一つの皺、一つのしみと云つた様な物を対象の中に見つけて、それを十倍、百倍に誇張しようと怒めたのだつた。」

「暗い部屋にて」という作品、九年十月『解放』に発表されたこの作において、葛西は、恋をしているという友人の生活を次の様に批判している。精細な批判である。

「彼が社へ出かけて留守の時に、私は何気なく、彼の机の上に載つていたカード式のかかなり厚い罫の無いノートを、何か小説の案でも書きとめてあるだらうと開けて見ると、それは意外にも、二人の間に往復されたラヴレターを一々書き写したものであつた。TよりKへ——KよりTへ——と云ふ風に、12の番号付で、目付も正確に、丁寧に細かく書き写してあるのである。如何にもTのやりさうなことだとほゝゑまれる気がして、気もとがめたがつい好奇心からザツと目を通して見た。毎日のやうに往復されたものである。ある場合には女の方からは返事が来なくて、TよりKへ——ばかしが四本も続いて、Tの惨めな哀求の態

度に、私も同情を感じない訳に行かないやうなものもあつた。彼等はどうか云ふ根本的問題で理解を求め合つてゐるのであるか、恋愛の遊戯に耽つてゐるのであるか、それともウソのつきつくらをしてゐるのであるか、そんな内容にまで立入つて読むほどの興味もなかつたが、全体の印象としては、Kの方の態度は卒直で、かなり自由で、筆鋒も鋭利であつた。半ば頃にはほとんど拒絶の態度を見せたやうなものもある。すると、天の岩戸に隠れた女神を引出さうと、手力雄ならぬ哀れなTは、小さなハンマーとか鑿とか云つたやうな小道具を持出して、コツ／＼と岩戸の下を叩くやうな姿を見せたり、雌蜘蛛の膨れた下腹を触鬚でさすつてはご機嫌を取るやうな哀れな雄蜘蛛だつたり、ドカリと崩れて来て、流れを堰き止めた堤を、お螻蛄（カマキリ）の一念でどうやらかうやら針めどのやうな穴を掘り、やう／＼に細い／＼流れを再び引出して来るやうな惨めな執着の工夫の痕を、私は彼の手紙のうちに読んで、やつぱし中年に入りかけた男の恋の惨めな悲しさに、私はひどく心を動かされたのである。最早私のやうに恋する可能性さへ失つてしまつたやうな人間の儂なさは分外として、彼の場合のやうな恋愛と云ふものゝ一層悲しいものだ、思はない譯に行かなかつ

た。」

友人の恋に對しても、勿論、このような觀察の成り立たないことはないであろう。しかし、「立入つて読むほどの興味もなかつた」とか、「全体の印象として」とか言うあいまいな立場から、友人を、「お蠅姑」や「雄蜘蛛」やに例えて冷笑することによって、ひそかに溜飲を下げる興味をはつきり持っている、何といういやらしい男だらうというのが谷崎の葛西批判である。そしてそこから谷崎は、更に一步を進めて、これでは「欠点のない人間は葛西の友人となる資格がないので、彼の周囲に近づいた者は、いずれも何等かの失敗をおかして、彼から敵しい非難か、冷たい嘲笑を受けねばならなかつたのである。」と論断する

この一点に関する限り、谷崎は極めて手敵しい。この点に關してもう一つ「兄と弟」(大正七年四月作)にその実体を見よう。この作は、題名の告げる通り、葛西自身と弟勇藏との窮迫した生活を描いたものであるが、その中に、その兄弟とは殆ど無関係なBという羽振りのいい人気作家を登場せしめ、その淫蕩で放埒な悪魔主義ぶりに對して、主人公をして存分の悪罵を吐かせている。

『併し今日のやうな、物質とか金とか才能とか、凡てが

生活の方便といふことから割出されて居る時代であつては、Bのやうな人間の存在も許されるだらう。併し時代が進んで、精神とか良心とか本当の深い存在に就て自覚が出來て、この責任と誇りに對して敏感になれば——さう云つた時代が來れば、Bのやうな人間から爪弾きされるといふだけのことで済むまい。恐らくは存在が出來ないことになるだらう。さうした時代は屹度來る。また來なければならぬ。Bが自分にしてやるやうな行為も、今の鈍感な世間人に聞かしては誰も一笑に付して了ふだらうが、さうした時代になつては、無論立派な決闘問題だ。Bを殺さなければならぬのだ……』

厭惡の代り、庄作は斯うした感想に耽つた。そのことが、Bに對する唯一の復讐である——彼はさう思つて自分を慰めたりした。」

こういう葛西に對する谷崎の批判を引く。『放浪の作家』は、こういう批判の集積である。

「心の中で相手を思ひきり罵倒する事が唯一の復讐だと思つてゐる此の主人公の気持は全く弱者の心理である。實際葛西は自己と對立して存在する世界では思ひの外弱くなる。或ひは弱いと思ひ込む。そして自分が不当に虐待され

てみると早合点してしまふ傾向がある。(これも彼の被害妄想の一つの現れであらうが)『不能者』の成瀬と主人公との場合がやはりさうである。此の他友人によつて、生活上の無能力者としてさん／＼にやつつけられてゐる彼自身の姿を自嘲的に描いてゐる作品は枚挙に暇がない程である。生活者としてはどんな弱者になつてもよい。だが芸術家としては思ひきり大胆にならねばならぬ——これが大流行以来の彼の覚悟だつたのである。

ここで谷崎の挙げてゐる三つの場合を整理してみよう。

(一)「不能者」——非難するもの主人公田口参吉、非難されるもの画家成瀬道夫。理由、恋愛観ないし対女性態度の相違。参吉は自己の純粹な女性観によつて道夫の女性蔑視と、金にものをいわず態度とを攻める。

(二)「暗い部屋にて」——非難者「私」、被難者作家Tの「お嬢姑おぢやうこの一念」

(三)「兄と弟」——非難者庄作(葛西)、被難者「B」、アブノーマルな快樂主義者。恋まで「生活の方便」。

この三例を通じて、明らかに見られる共通点は、葛西の分身は、常に道義的にその友人たちの悪を非難しているといふことである。そしてその悪は正しく非難に価する。こ

こに見られる悪は、一言にしていえば「非人間的悪」である。人間が人間をなぐさみの種とし、自己の享樂の道具としようとするが如き悪である。それは、いついかなる場合においても非難さるべき悪でなければならぬ。そう考えると、それが「被害妄想」であり、友人たちの悪意に満ちた戯画化であり、一旦そうしておいて「私」葛西が非難するといふ谷崎の非難は、実は、小説以前のモデルたる實在人物を谷崎が知つてゐること、あるいは自分自身がモデルであることを前提としてしか成立しないであらう。

ここで少しく付け加えておきたいことは、小説という芸術、いわゆる近代小説は、虚構によつて現実を再構成することをその本質とするといふことである。少なくともヨーロッパにおける近代小説概念はそうである。虚構をかまへる事によつて、現実よりも一層現実らしいイメージを読者に強いるところに、小説の生命があつた。もしそうだとすれば、谷崎の非難は、全くいわれのない言いがかりである。描かれたものが自己あるいは自己の知人であることを仮定した上での如上の非難も、もし葛西が、「あれは虚構だ、部分的にXのくせや口吻を借りたとしても……」と逃げれば、それまでのことである。しかし谷崎は恐らく承知

しないであろう。

「葛西の周囲の知人たちが彼の作品にモデルとして取入れられ、而も実在の姿を彎曲され、畸型的な人物として嘲笑的、侮蔑的な取扱ひを受けてゐることは周知の事実である。」と谷崎は言う。こういうことがどうして「周知の事実」であり得るのであるか。この問題は、大正期の文壇をめぐる少数のしかも熱心な文学愛好者の特殊な性格を考え合すことなしには、恐らく理解することの出来ない問題である。ここから私は、自然主義末流の私小説・心境小説の問題を引き出すことが出来るが、それはもう少し後にまわしたい。ただ一言、これは私の独断的であることを自ら認めつつも、葛西に対する谷崎の批判を、やはり葛西の例の空想癖（虚構による現実表現者を作者と考えると、この性格はいよいよその重要性を高める）の現われをそこに見たい。自分が、現実には、道義的であることに終始し得なければ得ないほど、いよいよ道義的なるものに引きかけてゆこうとする空想癖は、それが過度であるという非難は甘受しなければならぬにしても（何となれば過度とは誤っているということであるから）、本質的に非人間的なものではあるまい。人間は多かれ少なかれ、「及ばぬ時の神だのみ」をするもので

ある。神と無縁のものであればあるほど……。

大正八年度の記述はここで切り上げよう。ここまでが葛西における第一期である。谷崎の如く「無名作家時代」と言ってもよく、「文壇に登るまで」と言ってもいいであろう。だから「文壇登場の風貌」と題したのである。

今度は作家としての活動を、作品に即して記すこととする。

第四章 作家的活動の風貌

大正九年、数えて三十四歳となった葛西は、一月に第三創作集『馬糞石』を春陽堂より出版した。そしてこの月、相州鎌倉山の建長寺宝珠院に転居した。これが葛西の作家生活における第二期の始まりである。この年から関東大震災の時、大正十二年九月一日までの、三年半余、珍しくも葛西はこの僧房に腰をすえて動かなかった。この三年半余を第二期と見ていいであろう。その新しい僧房の姿は、やがて、その作品を通してこれを見ることとなる。そのことには後でふれることとする。

この年九年三月、東洋大学から「得業」の称を受け、「得

業士」となった。

四月、「千人風呂」を『解放』に、「鷺のやうに」(後「家鴨のやうに」)を『雄弁』に発表。

五月、「春」を『文章クラブ』に。

六月、「悪夢」を『改造』に、「小さな犠牲者」を『婦人公論』に。

九月、「M氏の失策」を『新潮』に。

十月、前述した力作「暗い部屋にて」を『新小説』に、それぞれ発表。葛西の作家活動は概して順調と言うべきであつた。如上の諸作の一短篇「春」の冒頭と結びとを引く。そこに葛西文学の本質を見る有力な一つの手がかりがあるからである。

「寺の池にも春が来た。齒朶などの生えた高い崖下の湿地の、小さな池である。木の葉や枯蓮で汚ならしく埋まり、金魚も鯉もゐないが、此頃沢山の糞も出て来て、夜も昼もグツ、グツとへんな声を出すので、うるさくて仕方が無いのである。何処からこんなに沢山出て来たのかと不思議に思はれる程である。朝目をさますとグウツ、晩酒を飲んでゐる時にもグツ、グツと来るんで、やり切れないと思ふ時がある。それが醜い恰好をして、狭い池の中で真黒く

見える程沢山泳ぎ廻つてゐる。一つの雌に三つも四つもの雄が掴まりつこをして、強さうな奴が後肢で他のものをグイ／＼と蹴つたりしてゐる。クワウ／＼と比較的可憐げな声を出してゐるものもある。重り合つた不様な姿を見せて浮いてゐるのはまだ真に徹したものでは無いやうである。真に掴んでゐるものはヂイツと底に沈んで動かないやうである。私は便所への廊下の往きかへり否でも應でもこれらの光景を見ない訳には行かないのである。」

続いて結末を引く。小品といつてもいい短い作品の半分以上の引用となる。

「彼は斯う云つて庭へ下りて、竹の棒を捜して来た。そして重なつてはう／＼泳ぎ廻つてゐる雄の頭のところを目がけては、ポンポン力任せに殴り廻つた。さすがに辟易して、未練らしく離れては躑躅の根株の下に匍ひ込むが、離れずに竹の先で地面へ刎ねあげられて白い腹を見せ、やう／＼離れるものもある。中に一つ特別に老大な雌にガツチリと掴まつてゐるのがあつて、二三度強く打たれても離れさうにないので、なんて執念深い奴だらうと友達は憤慨して地面へ刎ねあげたが、それは死んでる雌を抱いてるのであつた。白くふやけたハチ切れさうに膨れた不気味な

腹を見せ、伸びた手足をひろげて、地面に仰向けにひっくりかへつたが、雄は尚未練らしく喰付いてゐた。

『此奴はなんと云ふ馬鹿な奴だ！』と云つてまた一つ毆つて雄を放したが、友達も不快らしく眉をひそめて、雌の死骸をボンと藪の中へ刎ね飛ばした。

『なんて云ふ馬鹿者でせう、死んでるものをねえ……』と友達は棒を投げ棄て、ベツと唾を吐きながら繰返した。

『さうですねえ、厭な奴だなあ……』と、私も晴れた春の日の午後の好い気分を濁された不快な気持になつて、机の前にかへつた。

そして、自分等自身のやつてることが、自分等自身が、死骸に向つて生命を乱射してゐた今の愚かな雄と同じやうなことをして、過して来たのではないか知ら？——と云つたやうなこと語り合つた。

いつか池の底のそちこちに黒い粒々を持つた寒天の百尋のやうなものがどろりと沈んで、グウツグウツが聞えなくなり、不様な彼等の姿が見えなくなつた。がその代りに、今度はまた、コロコロ、コロコロと云ふもそつと可愛らしい声が聞え出した。』

以上の冒頭と結末とは、いずれもなかなか好い表現であ

る。志賀直哉の表現を連想させるものがある。それでいて、直哉のものとは随分ちがう。

例えば葛西の「春」と志賀の「濠端の住まひ」とを對比すると、それぞれの個性も浮かぶ。主題のよく似た二作である。ここでは「濠端の住まひ」の結末の一節を引くに止める。

「然し、事實はそれに対し、私は何事も出来なかつた。指一つ加へられない事のやうな気がするのだ。かう云ふ場合私はどうすればいいかを知らない。雖も可哀想だし母鶏も可哀さうだ。そしてさう云ふ不幸を作り出した猫もかう捕へられて見ると可哀さうでならなくなる。しかも隣の夫婦にすれば、此猫を生かして置けないのは余りに当然の事なので、私の猫に対する気持が實際、事に働きかけて行くべくは、其処に些の余地もないやうに思はれた。私は黙つてそれを観て居るより仕方がない。それを私は自分の無慈悲からとは考へなかつた。若し無慈悲とすれば神の無慈悲がかう云ふものであらうと思へた。神でもない人間——自由意志を持つた人間が神のやうに無慈悲にそれを傍観してゐたといふ点で或ひは非難されれば非難されるのだが、私としてはその成行きが不可抗な運命のやうに感じられ、一

指を加へる気もしなかつた。

翌日、私が眼覚めた時には猫は既に殺されて居た。死骸は埋められ、穿せんに使つた箱は陽なたで、もう大概乾かされてあつた。」

志賀直哉の表現は、読後に清爽感があり、葛西善藏のものとは逆に小暗い印象がある。そういう葛西その人の心情を写している一作、嘉村磯多の短編「途上」(昭和七年二月『中央公論』の一篇も引く。そこに葛西その人の風貌が明確に描かれているからである。

「囚はれの醜鳥しごどろ

罪の、凡胎の子

鎖は地をひく、闇をひく、

白日の、空しき呪ひ……

酒好きの高ぶつた狂詩人は、斯う口述して私に筆記をさせた。

『先生、凡胎の子——とは何ういふ意味でございませうか?』

貧弱な徳利一本、猪口一箇を置いた塗りの剥げた茶餉台ちやうだいの前に、禪ぜん一つの真の裸のまゝ仰向けに寝ころび、骨と皮

に瘦せ細つた毛牒けづなの上に片つ方の毛牒を載せて、伸びた口髭をグイグイ引つ張り／＼詩を考へてゐた狂詩人は、私が問ふと矢にはに跳ね起き顎を前方に突き出し唇を尖らせて、『凡人の子袋から産れたといふことさ。馬の骨とも、牛の骨とも分らん。おいら下司野郎たといふことさ!』

狂暴な発作かのやうにさう答へた時、充血した詩人の眼には零れこぼれそうなほど涙がぎら／＼光つた。」

この描写は、葛西その人をそのまま写しているとは言い難い。むしろ嘉村その人の心情に染められている。しかし、「狂詩人」のいう「罪の、凡胎の子」という感じは、やはり葛西その人のものであつたらう。

ここで、葛西の新しい住いとなつた宝珠院の姿を、「暗い部屋にて」という力作、大正九年十月『解放』に掲げられた作品から引く。

「十畳八畳二間統きの、天井の高い、終日日の射さない、ひどく湿ける寒い部屋である。私はその奥の八畳の方に陣取つてゐるのである。北向きの部屋の廊下の外は横に細長い池からすぐ数丈の高い断崖になつてゐる。齒朶や蔓草が匍ひさがつて、崖の上では樹木が風に騒いでゐる。箇々壁立千仞と云つた趣きである。或時には、人生と云ふものゝ

姿が、私にはこの壁立した断崖のやうに考へられることがある。この断崖を貫くだけの氣力と云ふものもなし、これを飛び越えるだけの天才も持たない自分のやうな人間に取つては、生活と云ふものはいつまで経つてもこの断崖のやうにそゞり立つて自分を壓迫してゐる。日の目を見ないじめ／＼した暗い部屋に閉ぢ籠められてゐなければならぬ。」

かういう記述に加えて、葛西は、宝珠院の老住職を次のやうに描いている。右の引用の前においてである。

「和尚さんも今年八十になつたのであるが、全く生きながらの仏様のやうな生活だ。『災難は誰にだつてあるだよ。だがよくお経を読んでゐると、大抵の場合大きな災難も小さな災難で済んで行くだ』と、此間も境内の綺麗な苔の花を一本々々引抜きながら、私に云つて聴かした。九つの年からの精進——仏へのお勤めと看経と境内の掃除のほかには余念も無さゝふな今の生活振。」

出家遁世は、葛西のひそかな願いでもあつたのであらうか、自己をとりまく人々に常にきびしい白眼を向けようとする葛西にしては、珍しく温かい描写である。

この作において、もう一つ注目すべきは、後に葛西の作

品の幾つかに登場し、「おせい物」という呼名を生むに到る「おせい」という少女が、初めて登場したのもこの「暗い部屋にて」である点である。

「建長寺の境内を通りぬけて、右に折れてこれからが半僧道だと云ふ狭い道の片側に、何々講といろいろな講中の名を染め抜いた旗など物々しく立てゝ、七八軒の茶屋が低い板葺の軒をならべて、江ノ島式の『寄つていらつしやいまし。ご一服召しあがつていらつしやいまし。お草履を召していらつしやいまし。お帰りなさいまし……』を、婆さんも娘も顔を並べて、一流の調子で呼び立てると云つた体裁なのである。C帝はずつと奥の方であつた。通りに向いた障子の中でゴリ／＼と鑿を使ふ音がしてゐた。爺さんは隙な月を鎌倉彫の盆の木地を彫つてゐるのである。かなり朽りかけた杉皮葺の店の屋根から、かなりの大木の樫が空を突いて葉の無い枝ぶりを張つてゐた。

『お客さんと云ふのはこの方だがね、うちでご飯を運んであげてもいゝんだがね、何しろ人手が無いもんだから、それでお前さんところへ頼まうと思つてね、うちのふるいお客さんなんだからよくご面倒見てあげて下さいよ』R屋の婆さんは、斯う云つて、私を古い馴染の、酒呑相棒かな

どのやうな懇意な調子で、悴とか嫁とか云つてゝも婆さんとはほとんど同年配らしいが、感じはずつと老けて見える C 帝の婆さんに私のことを紹介したのだ。

嫁の若後家も出て来た。おせいちゃんも出て来た。おせいは二十で、背丈の低い、肥えた、頬の赤いまつたくの田舎娘だ。角い幾らかお凸の額の下の小さな眼を臆病らしく輝かして、私にお辭儀をした。このおせいがその晩から三度々 S 院の石段を登つて来て私のところへご飯を運んでゐるのだ。」

葛西が、おせいの家に次第に大きくなる負債を作つたことについては、もう改めて言うことをしないで、翌大正十年のことにふれよう。

大正十年、三十五歳となつた葛西は、「村長の手記」以下七篇を書いているが、それらの中で、葛西の個性を知る上で興味のあるものは、「浮浪」(五月『国本』)と「仲間」(十月『野依雜誌』)とである。ここでは、先ず「浮浪」の冒頭を引くこととする。

『また今度も都合で遅くなるかも知れない。どこかへ行つて書いてくるつもりだから……』と、朝由井ヶ浜の小学校へ出て行く悴の F に声をかけたが、『いいよ』と F は例

の簡単な調子で答へた。

遠い郷里から私につれられて来て建長寺内の S 院の陰気な室で二人で暮すことになつてから三月程の間に、斯うした目には度々会はされてゐるので、F も此頃ではだいぶ慣れて来た様子であつた。私が出先きで苦勞にしてゐるほどには気にしてゐない風である。近くの仕出し屋から運んで来るご飯を喰べ、弁当を持つて出かけて、歸つて来ると晩には仕出し屋の二十二になる娘が泊りに来て何かと世話をして呉れてゐるのであつた。」

この頃葛西の長男亮三は数え年十三で父と二人で「暗い部屋」に住んでいたことが知られるとともに、やがて力作「不良児」(大正十・七)の書かれる原因がここに見られる。

もう一つ付記したいことは、葛西の例の「放浪」癖は依然として改まらず、借金が重なり、原稿が書けなくなると、彼は直ぐ何処かへ遁走を試みる。そのような遁走の累積は、やがて彼の生活自体を「放浪の生活」として行く。その根源に働くものは、やはり、現実を現実として直視し、現実の苦惱を現実の場において克服することを彼に不可能にした「空想癖」だつたと思う。それは、第一義的なるものへの感傷的感溺であり、現実を第二義以下と観ずる一種

の形而上学でもあった。ここから「仲間」に目を転ずることとする。この作に關して特に言うべきことはないが、彼の友人が一人一人引き出されて、主人公の毒舌化の対象とされているところに、見るべき点がある。その冒頭には次のようなことばがある。

「暗鬱、孤独、貧乏——生は、私に取つては充分に忌避するに値ひするものであつた。所謂都會的、貴族的、享樂的——さう云つたやうな傾向の芸術が現在の流行の中心をなしてゐるものとすれば、私の如きは余りに縁の遠い人間であらねばならぬ。がその点については、私は自分の孤独を嘆いてゐない。私の一番悲しく思ふことは、貧乏であること、そしてその貧乏に打克つてグン／＼金持になつて行けるほどの豊富な創作力を恵まれてゐないと云ふことである。昨年は一昨年よりも貧乏したが、今年はまだ昨年に輪をかけての貧乏である。この順序で以て進んで行くとする……おゝ神よ、私の前途に憫れみを垂れ給へ——と云ふことになる。空飛ぶ鳥、荒磯に藻貝を拾つて喰べてゐるやうな乞食の果に至るまで、妻を愛し子を思ふ情には變りの無い筈である。がそれと云ふもつまりは貧しく而も天分薄く生れついた身で斯様なことになつてはつてゐる不心得か

らだと、一言の下に叱り飛ばされてはそれまでの話であるが、それと知つて尚嘯りついでゐねばならぬと云ふことも、つまりは神の戯れと云ふもので、自分からこの生を棄てない限り遁れられさうもない運命だと、自分としては諦めてゐるのである。……」

「運命だと、……諦めてゐる……」と告げられると、読者の内には自然に、一の晩年の風貌が浮かばずにはいないであろう。未だ三十五歳であつたが、葛西の生は四十二歳で終つたのである。そういう印象に一つの現実性を与えたのがこの「仲間」であつた。

「仲間」における「私」は勿論葛西、「野田」は宇野浩二、「丸山」は三上於菟吉、もう一人の「木村」は、大正十三年の作「湖畔手記」にも登場する。後でふれる。この作の結末は、「私」と「木村」との喧嘩の描写である。

「『K来い！ 角力を取るから来い！』と、隅にぐつたり坐つてゐた私に呼びかけて、蒲団の上に身構へした。

『駄目だつて云ふに！ そんなことをしたら俺は死ぬぢやないか……』

『死んだつて構はない。生きとつたつて何になるか。さあ来い！』と、彼は執拗に叫んだ。

『貴様は……』と云つたが、何かしら私はカアツとしてしまつた。

『貴様は若い細君に遁げられたんで、俺に角力を挑む気なんだな……よし！ 貴様なんかに敗けてたまるか！』

私は斯う叫んで、瘠せてはゐるが背丈の自分よりも四寸ほど高い彼の身体に夢中で跳びかゝつて行つた。そしてがむしやらの腰投げで一氣に彼を倒して抑へつけにかゝつたが、はね返されて、再び取組み合になつたが、今度は私が壁際に抑へつけられた。私は拳固で彼の咽喉を攻めて防いだが、咯血の恐怖は私の頭を打つた。

『貴様は俺を殺す気か……参つたから放せ、放せ！』私には實際彼の眼玉が殺氣に燃え立つてゐるように見えた。

『放さん！ 貴様のやうな病弱者はいつまで経つたつて放さんぞ！』と、彼はその細長い骨立つた膝頭で、鳩尾みづなごのあたりを一層強く抑へつけた。

『そんな乱暴なこと云はんで放して呉れよ。苦しい！ 苦しい！ 俺はまた血が出るよ。許して呉れ。……君許して呉れよ』と、私は半ば泣声になつて、依然彼の咽喉を攻めながら云つた。

この結末の描写について谷崎精二は言う。

「これを読むと葛西をよく知つてゐる者には滑稽に感ぜられる。葛西は友人に抑へつけられて『君許して呉れよ』などと泣き声を揚げる様な弱い男では決してない。」

そして谷崎は、彼自身と葛西とのたった一回の喧嘩の話を記している。少し長く引く。

「その頃筆者は葛西と大喧嘩をした事がある。（これは二人の永い交際の中で唯一度の出来事だつた。）或る正月の晩、葛西は鎌倉から上京して筆者の家を訪ねた。三上於菟吉の家で餐応されたと云つて、彼はひどく酩酊してゐた。

『少し遅いが、今日は年始のつもりで来たんだから一杯飲ませないか。』

彼はそう云つたが、泥酔の度が甚だしかつたので、筆者は酒を出す事を断つた。

『今度ゆつくり飲まうよ。今夜は君がひどく酔つてゐるから厭だ。』

葛西は不機嫌で帰るかゝつたが、格子口で二言三言云ひ合つている中に、突然下駄を手を持つて打つてかゝつた。筆者は喧嘩が大嫌ひで、物心ついてから人と腕力の争ひをした事が殆どないのだつたが、正当防衛で止むなく応戦した。何と云ふ乱暴な奴だ——さう思つて彼がひどく憎くな

り、遮二無二突進して彼を投げ倒し、馬乗りになつて彼の頭をぼか／＼殴つた。葛西は田舎育ちで相当腕力もあり、酔つてゐなければ筆者などは敵ひさうもないのだが、彼が泥酔してゐて足許が据わらないため、彼の負けとなつた。

『おれは病人だぞ、よくも病人を殴つたな。肺病やみの血痰でも飲め……』

抑へつけられながら葛西はさう怒鳴つて、筆者の口許へ血痰を吐きかけた。(これにはひどく驚かされたが、後で聞くと血痰ではなく、唯唾を吐いただけで、唇が切れたゝめ、唾に血がまじつたのだつた。)それから彼は頻りに下から筆者の脛を蹴上げた。これも後で聞いた事だが、葛西は喧嘩をすると相手の脛間を蹴つて気絶させるのが得意なのださうであつた。二人共跣足になり、二人共眼鏡が飛んでしまつた。(中略)

その翌日、筆者は三上於菟吉の家で葛西と会見した。

(たしか葛西が三上の家へ前後策の相談に行き、三上が筆者を迎へに使をよこしたのだつたと思ふ。)

『あんな事で君と交りを絶ちたくないが、昨夜の出来事は余りに不愉快だ。今後酒気を帯びた時は絶対に来訪を断りたい。』

筆者がさう云ふと、彼はおとなしく答へた。

『まあ、まあ、そんなに云はなくてもいい。僕は君より年長だ。自分のした失策はよくわかつてゐるよ。君に云はれなくつても今後注意するから、そんな四角張つた事は云はんでもよからう。』

実際筆者が少し云ひ過ぎた形だつた。その酔つて来る事はあつても、彼は決して二度と粗暴な挙動をした事がなかつた。此の事件を葛西は当時『谷崎から家庭絶交を食つた。』と評してゐた。

「仲間」においても一つ注目されるものは、葛西が、喘息の他に胸を悪くしたという記述をしている点である。

「二度咯血した」「カルシウム注射に隔日通うほか絶対に安静を命じられた」ということばもある。元来強健であつた葛西の身体も、このあたりから衰弱を早め始めたのであつた。

「仲間」の書かれたこの年大正十年は、明らかに葛西の生の一転機であつた。

この年の七月、継母の死を送るため郷里に帰つた葛西は、十一月には「雨」を『中央公論』に発表、創作集『贗物』を新興文芸叢書第十八篇として春陽堂より刊行され

た。父が上京し、弟勇藏の牛込納戸町の家に同居。

大正十一年、三十六歳の年を迎えた葛西は、次のように書き続けた。

一月、「本来の面目」——『太陽』

二月、「父の出京」——『中央公論』

七月、「疵」——『新潮』

八月、「不良児」——『改造』

九月、第四創作集『哀しき父』——改造社

こういう活躍を示したこの年七月十三日、父が牛込の弟宅で病死した。

葛西が、友人をモデルとした作品の中で、友人を冷笑し罵倒する、あるいは「私」の周辺の人々に苛烈な目を向けることによって作品を形成するという傾向を最も強く示したのは、その鎌倉移転の前後、即ち大正八年—十年位の時期であったことは、作品自体から推定出来ることである。そういう葛西の周囲に向ける白眼がその苛烈さを加えることと比例して、彼をとりまく現実も亦次第に苛烈味を増していったということは、興味ある事実である。現実を蔑視するものは必ず現実から蔑視されずにはいない、という人間の真実を、どう考へるべきであらうか。芥川龍之介の場合、

逆に志賀直哉の場合……。ここでは、ただそれが虚構による表現であらうと、実生活の直写であらうと、作家というものの作品における現実観は、自らの現実観に他ならぬという事、その作品における肯定や否定は、やがて、作家の現実の生に大きく作用するということだけを言っておきたい。作家は現実を引き寄せ、変革する。そしてその夢に即して生きる。そう言っても言いすぎではあるまい。志賀直哉にとつては「暗夜行路」とは、現実における自らの生の一行路だったのである。谷崎潤一郎は、あらゆる豪華なものを欲したが故に、彼の生は豪華たり得たのである。そうだとしたら葛西は……。彼はむしろ「哀しき父」であることを欲したのである。そういう葛西にとつて、現実はいよいよわけわしくなつたとしても不思議ではあるまい。「何でも癡つてはいかんようですね。癡つては思案に能はずと云ふが、僕なんかあまり貧乏に癡りすぎたんで、自分から喘息だか肺病だかヘンテコな病氣などひり出したやうな訳で……」

これは、先に記した「本来の面目」の一節である。

宿痾の喘息、それに神経痛、さらに肺患等の肉体的なものが、妻子の離反、ただ一人手元に引きとつた長男の上に

も暗い陰を生ぜしめたのである。「父の出郷」の中にそういう描写がある。

『ほう……お前の額には随分皺が多いんだねえ！ 僕にだつてそんなには無いよ。猿面冠者の方かね。太閤様だな。……ハ、ハ。せい公さうだらう？』と茶湯台の向うに坐つてお酌してゐた茶店の娘に同感を強ひるやうな調子で云つた。

それが失策だつた。Fは黙つてちらりと眼を私の方へ向けたが、それが涙で濡れてゐた。どんな場合でも、涙は私の前では禁物だつた。敏感な神経質な子だから、彼はどうかすると泣きたがる。それが、泣くのが自然であるかも知れないが、私は非常に好かないのだ。凶暴な人間が血を見て一層惨虐性を發揮するやうに、涙を見ると、私の凶暴性が爆発する。Fの涙は、いつの場合でも私には火の鞭であり、苛責の暴風であつた。私の今日の惨めな生活、瘠我慢、生の執着——それが彼の一滴の涙に依つて、たとへ一瞬間であらうと、私の存在が根柢から覆へされる絶望と自棄を感じない訳に行かなかつた。この哀れな父を許せ！父の生活を理解して呉れ——いつの場合でも私はしまひには斯う彼に心の中で哀訴してゐるのだ。涙で責めるな！

……私はまたしてもカアツとしてしまつた。

『何だつて泣くんだ！ この位のこと云はれたつて泣く奴があるか！ 意気地無し奴！』

『だつて……人のことを……猿面だなんて……二人で馬鹿にするんだもの……』と、彼はすすりあげながら云つた。

斯う聞いて、私は全身にヒヤリとしたものを感じて、口を緘じた。二人で馬鹿にする……この不用意な言葉が、私の腹のどん底へ、重い弾丸を投じたものだ。成程そんな風に考へたのか、火鉢の傍を離れて自分はせつせと復習してゐる、母や妹たちのことを悲しく思ひ出してゐるところへ、親父は大胡座を掻いて女のお酌で酒を飲みながら猿面なぞと云つて女と二人で声を立てて笑ふ。それが癩に障つたのは無理もないと私にも考へられたが、しかし兎に角泣くと云ふことを私は非常に好まなかつた。

『兎に角貴様のやうな意気地無しは俺には世話が出来ないから、明日早速国へ帰れ！』と私は最後に云つた。

この描写はいたましい。我々はここに葛西の意味させたものとは別の意味において「哀れな父」を見出さないわけにはゆかないであらう。それは、自己に最も近いものであ

る子供に、その近さの故に父のエゴを全く無制限におしつけようとしてはばからぬ「哀れな父」を！

ここから大正十二年度、三十七歳の葛西の風貌に目を向けることとする。この年もかなり沢山書かれています。

一月、創作集『悪魔』を金港堂より出版。

「おせい」を『改造』に。

「歳晚」を『新潮』に。

二月、「父の葬式」を『中央公論』に。

三月、「日なた」を『新潮』に。

四月、「ある夜」を『改造』に。

六月、「病友」を『局外』に。

十一月、「迷信」を『随筆』に。

この年の九月一日に起った関東大震災を鎌倉で受け、上京して本郷の西城館に下宿した。これらの中、先ず「歳晚」から一節を引く。一節といっても小作全体の四分の一強である。

「私は夏以来一枚も書いてなかった。父の死が私を喪心させた。そして何の用意も出来てゐない私自身を見せつけられた。心の方向を失つた自分には、疲労と倦怠のほか何物も見出されなかつた。三月余りの病床の中で、父が郷里

に僅かばかり残して行つて呉れた林檎畑の中の小屋でも修繕して、そこに隠遁して、百姓の真似でもして一生を送らうか——そんなやうな空想に耽つたりしたが、しかしそんなことをして見たところで、それで自分の一生がどうにかなると云ふ訳のものでもなかつた。父に支へられ、励まされて、この三十六と云ふ年までどうやら歩いて来られたのだつた。」

続いて「父の葬式」より引く。短い引用である。弟との会話の一節である。

「それにしてもなか／＼いゝおやぢだつたね。子供等には随分厄介をかけられ通したが、子供等にはちつともかけてゐない。死んだ後にだつて何一つ面倒なことつて残してないし、実に簡單明瞭な往生ぢやないか。僕なんかにはちよつと真似が出来さうにないね。……」

もう一つ、「ある夜」から結末を引く。

「風のない暗い静かな晩である。山寺のガランとした部屋の外では、裏敷の中の古池の蝦蟇が*の聲ばかりだ。一年前の晩の父の姿が懐かしく思ひ出されると同時に、自分の演じた浅ましい狂態がはつきりと浮んで来て、自分は苦々しい憂鬱な気分になつて来た。自分は四つん這いになつて、

ワン／＼吠えながら部屋の中を駆けずり廻つた。その揚句『斯うして片脚を揚げて小便をするのはとこ犬、斯うしてお尻を地につけて小便をするのはをんな犬、といふところですが……』斯う云つて、父に向つてワン／＼と吠えて見せた。が『お前も大概の馬鹿だとは知つてゐたが、それほどの馬鹿とは知らなかつた……』斯う云つて大きく苦笑した父は、それから四ヶ月と経たずに、自分等を棄て、東京の弟のところへ死んだ。

私がくだくだしく、葛西の父への親愛の情を作品に探し求めたのは、実は「不良児」と関連させて、葛西のその子Fに対する「無関心」を際立たせるためであつた。そこから一つの事実が引き出して来られると思ふのである。

葛西の父への親愛の情は、単に人間的親愛、あるいは血肉の情という以上に、父の上に子である葛西の認めた「家長の権威」のためであつたと私は考えるのである。「おやぢの奴、僕の前では随分威張るんだからなあ」といい、「それがまた僕には好きでたまらなかつた」と言う葛西は、肉親の父の上に家長の権威を重ね、その前に進んで頭を垂れたがっていたと見て誤りではないであらう。偉大なる父、強き父への子の崇拜である。

封建の世より長く保存され続けた日本の「家族制度」が、その根幹において、「家長専断による統一」であつたことは、改めて言う必要もないであらう。「固有の淳風美俗」として保持され、讚美されたわが「家族制度」は、一貫してこの本質を変えなかつた。それは、いささかでもそれを批判し、動かす如き現象に際しては、常に政治権力が強く伝統を保護し続けたからであつた。

昭和十八年、文部省社会教育局から出された『戦時家庭教育指導要項』に見られる家の定義は、三条より成つてゐるが、その第一において次のように告げられている。

「我が国における家は祖宗一体の道に則る家長中心の結合にして人間生活の最も自然なる親子の関係を根本とする家族の生活として情愛敬慕の間に人倫本来の秩序を長養しつつ永遠の生命を具現し行く生活の場なること。」

これは一面「自然」であり「本然」であつたかも知れない。しかし、「家長」に特別の権威を法的に認める「家は、当然「家族」に、何よりも先に「家長」を敬慕すべきことを強制した。「家長」は、その人間的実体とは別に、「敬慕されるべき存在」であつた。そういう「家長」に引率される「家族」にとつて、「家長」とは何よりも「権威」

ないし「権力」に他ならなかった。だからその子達は、物心ついて以降、肉親である「父」と、「家長」である「父」を不断に意識しないわけには行かなかった。「父」は、自己の権威に温順である限り改めて「子」を意識する必要がなく、逆に一旦自己の権威に反抗する「子」は、もう「子」ではなかった。「父」と重なりあった「家長の権威」は、こうして、「父と子」との真の人間的交流をさまざまにわけている。「自然派」の作家よりも、むしろ「白樺」派の作家に見られるという事は、注目に価する現象である。そこには、田舎と都会、中流と上流とにおける開化の度合いの問題もあるが、今はふれない。ただ、島崎藤村の「家」と、志賀直哉の「和解」とを読み比べて見ると明らかである。

ここで葛西にかえり、先に記した葛西の「父への親愛」の中に、「家長」に対する敬愛の情を読みとれることは、決して不自然でも、無理でもないことが解ってもらえればいい。そういう心情を持って、やがて、自らが家長となった時、家長としての自己への敬愛を求めるのは当然である。事実葛西は、自らの子Fに対しても、弟勇藏に対しても、

はつきりとそれを要求していた。

ここで、章を改めることとする。

第五章 晩年の風貌

葛西善藏は、昭和三年七月二十三日に没した。明治二十一年一月十六日に生れた葛西は数えて四十二歳の時であった。そういう葛西の生にとつて、大正十三年から昭和三年以降は世田谷区三宿に住んだので、この期は三宿時代と呼んでもほぼ誤りはない。そういう晩年の最初の年、大正十三年の作品を挙げることから始める。時に三十八歳の葛西であった。

二月、「遺産」——『改造』

四月、「蠢く者」——『中央公論』

五月、「妻の手紙」——『隨筆』

六月、「落葉のやうに」——『婦人公論』

七月、隨筆「酔狸州七席七題」——『中央公論』

九月、「従弟」——『女性改造』

十一月、「湖畔手記」——『改造』

創作集『椎の若葉』——新潮社

十二月、創作集『子をつれて』（代表的名作選集）——新潮社

この年の九月、日光湯本旅館に滞在中、咯血し、療養に努めた。この年は、前年九月、震災にあって上京し、本郷弓町西城館に下宿し、そのまま引続いて下宿を続けていた時である。大正十四年に東京市外世田谷三宿に転居、いわゆる最晩年の三宿時代に、その前の鎌倉時代から転換した過渡期がこの十三年であった。そしてこの年を特色づける出来事は、「おせい」問題であった。先ず、十一年十二月の短編「おせい」の結末の一部を引く。この短い記述の中に、既に「おせい物」の性格、延いては「おせい」をめぐる悶着の影さえあざやかに映っている。その意味でこの小篇は無視できない。

『「どうだねおせいちゃん、春になつたら僕の方のみなかへ行かないか。奥州の方も見ておきさ。山の林檎の世話なぞして、半分百姓見たいなことをして暮すつもりだがね、急にはうまく行くまいがね、三年もしたらどうにか百姓並の飯位は喰へるやうになるだらうと思ふよ。僕の女房だつておせいちゃんが行つて呉れると屹度喜ぶよ。斯うして四

五年も別れて暮して来てるんだからね、女房だけでは僕の仕事の方までの世話が出来ないさ。僕の方のみなかからだつて、いゝお婿さんは見つかるよ』と、私は此頃も酒を飲みながらおせいに云つた。

『あなたさへつれて行つて下さるなら、私はどこへだつて行くわ。お婿さんなんか私は要らないわ……』と、おせいはいいつもの相手を疑はない調子で云つた。

『行かうよ。いつもの通りあの鞆を待つて、魔法壇を肩にさげて……』

どこへ出かけるにも、おせいは私の薬を飲むための用意の魔法壇を肩にさげさせられた。さうした背丈の低い彼女の姿を、私は遠い郷里の山の中へ置いて、頭の中で描いて見た。』

そういう「おせい」のN（葛西）に寄せるひたむきとも言うべき愛情は、「蠢く者」に見ることが出来る。関東大震災の強い印象の記述の中に。

「自分は高い石段の上から松の木の間を通して建長寺の大本堂、方丈、仏殿などの潰れた屋根を見下ろして、さつきの叫び声から想像してもかなり人死にもあつたことゝ、云ひやうのない気持で突立つてゐた。さうした場合、最初

に、石段の下から、『Nさん生きてゐるかよう！ みんな生きてゐるかよう』斯う泣き声を振り立て、半ば狂乱の姿の藁草履穿きで、石段が刎ね、上からケン飛んで行つた井戸の屋根——さうした間を、危険も忘れたかのやうに駆け上つて来たのは、おせいだった。『生きてる！ みんな生きてるぞ！』自分も思はず大きな声で叫んだ。その時のおせいの顔を、自分は忘れることが出来ない。落ちて畳の上を流れた玉子と、おせいの真剣な泣き顔——その印象が、恐らく一等強く自分の頭に焼きつけられてゐるかも知れない。』

「蠡く者」に告げられている出来事は、殆ど事実そのままと考えられるが、その物語るところによると、おせいの上京後、鎌倉から叔父が連れもどしに来る。やがて叔父が、警察に直接人間相談として持ちこみ、警察から直接おせいの呼び出しが来る。しかし、おせいが自発的に東京に止まると言う以上どうにもならず、空しく帰る。その時おせいには「借金の取り立て」を在京の口実とした。その前に一度、金を算段してせめて夜具だけでも欲しいと、おせいを鎌倉に帰したことがあったが、その折おせいは、金だけ置いて手ぶらで帰ってくるということがあった。葛西の怒罵

は、雨となつておせいにそそがれた。しかし、おせいは、何と言われようと断固として帰ろうとしない。

『わたし、帰りません！』

『帰りません、と云つたつて、俺は帰すよ。もう大抵にして、帰つて貰はうぢやないか。下宿へだつて、迷惑ぢやないか。居催促としては執念深過ぎる！』

『……あたゐ、それでは、いつ居催促だと、云つた！』

いつ云つた！』おせいは斯う云つたが、唇を歪めて、今にも泣き出しさうな顔して、男のやうに濃い眉の下の小さな眼をいつばいに瞠つては、自分の顔を正面まへもとに視た。

『いつ云つたつて……さうぢやないか、そのほか理由がないぢやないか。兎に角迷惑だから、出て行つて呉れ。警察でも、お前はさう云つて来たんださうぢやないか。兎に角明日の朝は、俺の寝てゐるうちに出て行つて呉れ。出て行つて呉れさへすると、文句はないんだから』

『あたゐ、何と云はれたつて、出て行かない。追い出されたつて、出て行かない。家へ帰らないし、どこへも出て行かない。行くもんか！』

こゝろ連日のいさかいの中にあつて、葛西の心に一点の弱味としてつきまとつたのは、おせいの妊娠ということ

であった。妊娠したのかしないのか、葛西には不明であった。その疑惑が明白になったところでこの作は終るのであるが、表現は正に異常な緊迫を告げている。葛西とおせいの心情・行為もその通りであった。そういう状況においておせいは、妊娠の問題を始めて明確にする。

「……自分はカツと夢中になつて、『こん畜生！』と叫び続けてゐるおせいの顔や頭と処構はず打つたり蹴つたりしてゐたが、ヒーツと云ふ悲鳴を聞いて、手足を止めておせいの顔を視ると、口からタラ／＼血が出てゐたので、自分もゾツとした。それでまた彼女は気でも狂つたかのやうにしがみ付いて来た。

『こん畜生！　こん畜生！　お前はあたいのあれを忘れたね。あたいのあの、大事なあのことを、忘れてゐるんだね、お前さんに見せこそしなかつたが、もう形がちやんと出来てたんだよ。丁度セルロイドのキューピーさん見たいに、形がちやんと出来てゐたんだよ。あたいが誰にも気付かれないやうに、そつと裏の桃の樹の下に埋めて、命日には屹度水などやつてゐたんだよ。この十九日で丁度になるんだよ。それを貴様は何だ！（中略）さあ、はつきり云つて御覽！　それとも、あたいの口から、こんなことまで云ひ

出させたくつて、斯うして来たのか？　……エーン、口惜しい！　口惜しい！』見る間に紫色に腫れあがつた唇から血をタラ／＼畳の上に滴らし、吊るしあがつた眼から涙を溢れ落して、おせいは子供のやうに泣きじやくつた。

こういうおせいの涙の前に、全面的に降服せざるを得なかつた葛西は、だからこそこの作を「蠱く者」と名付けたのであつた。結末から引く。先の引用の直後からである。

『あーん』と、自分は打ちのめされた気持で、彼女の両手を取つた。

『さうか／＼、もうよし／＼、俺がわるかつた。俺はこの通り手をつけて謝まるから、もう勘忍して呉れ。（中略）どうか頼む。もうようく解つたから、もう泣くのをやめて呉れ……』斯う云つた自分も、知らず／＼、泣いてゐた。

その後の葛西の生を、次の様に告げて、この作は終る。

「鴨居の取れた黄色い壁の部屋を出て、午前と午後との二度、父の姿、おせいの所謂キューピーさんのこと、郷里の子供たちのことなどを思い描きながら、日課の散歩を続けた。本郷通りの銀杏の並木の芽生えはまだ見られなかつたが、空の色はすっかり春だつた。『おせいの家の、その桃と云ふのが、もう咲いてるか知ら。近いうちおせいの間

題傍々出かけて行つて、見て来ようかな……』斯んなことを思つたりしては、一日々々と散歩区域を拡げること、努めた。」

自らを「蠢く者」と呼んだ葛西晩年の名作は、「湖畔手記」と「血を吐く」とであるというのが一般の評価である。先ず「湖畔手記」の性格を見よう。それはやがて、いわゆる心境小説自体の性格の解明につながるであらう。

先に記した通り、大正十三年十一月の『改造』に「湖畔手記」の掲げられた時、葛西は数えて三十八歳であった。この作は次のような書き出しに始まる。

「たうとうこゝまで逃げて来たと言ふ訳だが——それは實際悲鳴を揚げながら——の気持だった。」

先ず、そういう気持で、日光湯本まで「逃げて来た」経路を見よう。

「自分」は、咯血して死に瀕していた友人Kを見舞った帰り路、神楽坂の鳥屋でおそい昼食を食べ、酒を飲んだ。そして下宿からの出がけにポケットに入れて出たもう一人の友人Sの手紙を読んだ。堅実な家庭生活十年、その間三人の子の父となつたSは、玄人の女と生命がけの恋をし

て、当時信州別所温泉に出かけていた、手紙はそこから来たものであった。

「高原に立ちて四方の山々を眺め、雪を見る、多少の感慨無き能はず——斯う云つたやうな文句が走り書きに書かれてあつた。斯うした簡単な文句が、自分にはいろ／＼な事を想はしめた。羨望とも、同感とも、同情とも、云ひやうのない気持だつた。何と云ふヒタ向きな男だろう！勇敢な酷烈な恋——自分は、気持を引緊められるのを拒ぐことが出来なかつた。彼等の直情な恋に較べて、自分とおせいとの関係の、如何に醜く、耻づべきだか。互ひにドブ泥のなすり合ひをしてゐるやうなものなのだ。恋でもなく愛でもなく、そして彼女は妊娠三ヶ月？ ……自分は飲んだ酒がグツとこみあげて来るやうな気持がした。浅ましくも、呪はれた、自分等二人だ。妻よ、軽蔑と憐れみを以つて許してほしい。そうだ、自分は今では、おせいにすら軽蔑されてゐるやうな、すつかりヤクザな人間なのだ。

『俺もどこかへ行きたい。どこかへ、行つちまいたい。』（下略）

かういふ心情において、都会の片隅での泥沼のような生活の只中から、真直に「海を抜くこと五千八十八尺の高

処、俗塵を超脱したる幽邃の境」に飛び移ったのである。それは文字通り対極への飛躍であり、山頂への脱走であった。しかも、「この手記は最初から妻にあてゝおせいとのいささつ的一切を謝罪的な気持で書くつもりだったが……」ということばも篇中に明らかである。それだけに脱走を果した瞬間に感得された感慨は深かったが、しかし、それは泥沼の中から一步一步足もとをかためて抜け出し、一步一步登りつめた高所では断じてない。だからこそ生活の苦く黒い影は断じて「自分」即葛西にまといついて離れなかつた。そういう心情を精細に告げたところを引く。

「白根山一帯を蔽うて湧き立つ入道雲の群れは、動くともなく、こちらを庄しるやうに寄せ来つゝある。そして湖面は死のやうに憂鬱だ。自分の胸は弱い。そして痛む。人、境、俱不奪——なつかしき、遠い郷里の老妻よ！

自分は今ほんとうに泣けそうな気持だ。山も、湖水も、樹木も、白い雲も、薄緑の空も、さうだ、彼等は無関心過ぎる！

今日は東京で、親しい友人の著作集の出版記念会に、自分も是非出席しなければならぬのだつた。それも駄目、あれも駄目。仕事の方も駄目、皆駄目なことになるのだ。

斯うしてすべての友人からも棄てられ、生活からも棄てられ、結局生ける屍となるか、死せる屍となるか、どちらかなんだらうが、惨めな悲鳴を揚げつゝ逃げ廻る愚か者よ！自分は自分のその、惨めな姿を凝視するに堪へない。

雪の山が、いつの間にか、群山を庄してしまつてゐる。湖水は夕景の色に變つてゐる。自分は少し散歩して来よう。……

白根山、雲の海原夕焼けて、妻し思へば、胸いたむなり。

秋ぐみの、紅きを噛めば、酸く渋く、タネあるもかなし、おせいもかなし。」

この抒情は、緊密な質において、清澄な印象において、忘れ難い。しかし、それは、一方において、遠い郷里の老妻と、都会の一隅のおせいとに引き裂かれた心、もう一方において、人生の修羅場と幽遠の境とに引き裂かれた心という二重の分裂から生じた抒情である。かかる抒情の性格のうち、私は、日本近代における心境小説に普遍的な一性格を見ることができると思う。と同時に、ここに、葛西善藏晩年の風貌も浮かばずにはいれないと思う。

凡そ思想ないし理念と呼ばれ得るものは、生活体験に根

ざし、生活事実との悪戦苦闘を通じて形成さるべきものである。このことは何人にも明らかな事実であろう。然るに、日本に於ては、その地理的条件、歴史的条件から、生存のためのきびしい闘争の経験には、比較的乏しかったこと、しかも他方、先進国との接觸が可能であったことによつて、本来自己の生活から形成すべき思想・理念を、容易に外から輸入することが出来た。それは、ある思想・理念に到達するために、当然たどるべき内的過程の省略の可能ということであり、ひいてはその内面過程の欠如ということでもあった。かくして日本人は、さまざまな思想・理念を説き立てたけれども、自分の全存在を賭けての思想・理念の表現されたことは極めて少なく、日本は古来「言挙げせぬ国」であった。以来文化の受容に當つて腰々口にされた「和魂漢才」とか、「和魂洋才」とかいう言葉も、実は、借物が利用出来るが故に、本物は事実の次元に止めておくことを意味した。その結果、本物と借物との間にはおのずからずれの生じないわけにはゆかなかつた。だからそこで、そのずれをたくみにあやつることが必要となつた。それが他ならぬ日本の「勘」であり、「肚」であり、「心境」であつた。日本における「心境小説」を、我国固有の「思

想小説」と見る見方も、右のように考えると必ずしも不当な規定ではなくなるわけである。

「血を吐く」は、大正十四年一月の『中央公論』に掲げられた作品であるが、この短篇は『湖畔手記』の続篇である。その点を明確に告げている谷崎精二の文章を引くこととする。これは、昭和二十七年に岩波文庫として刊行された『子をつれて』の九篇の最後に置かれた作品である。谷崎の文章とは、その岩波文庫に「解説」として書かれたものである。短いものだから「血を吐く」に関する部分を全部記すこととする。葛西の晩年の風貌が巧みに示されているからである。

『血を吐く』は『湖畔手記』の続篇とも見らるべき短篇だが、作者のくだ／＼しい感想や、述懐が記されてなく、謂はば毒を吐き切つた後の様なすが／＼しい心境から素直な叙述を進めたもので、短かいながら出来栄から云ふと『湖畔手記』に劣らない作品である。高等文官の試験に首尾好く合格して、元氣よく官界へ乗り出さうとする若い法学士と、孤独と病弱に悩む、わびしい中年の作家との対照も自然であるし、その若い法学士が主人公を劬^{いた}はり、一日一日と出立を延ばして彼と付合つてくれる気持も美しい。

その法学士が立つてしまふと、広い旅館に葛西（主人公）一人しか客がなくなるのだ。

五日間、朝から飯も食はずに酒を飲み続け、到頭血を吐いて倒れた葛西は、無意識の中に探してゐたかも知れない死場処として此の湖畔も悪くないと思ひ、ほゝゑましい気持から合せた眼瞼が熱くなるのを覚える。葛西は本当にあの時あのまゝ死んでもよいと思つたのであらう、作者の和やかな諦観が此の作品の印象を清めてゐる。」

葛西における作家的活動は、「湖畔手記」の山頂から「血を吐く」に直接続いてゆくけれども、大正十四年以降は、心身ともに頹廢衰弱が甚だしく、強いて言うべきほどの作品はないと言つても言い過ぎではない。ここでは、「血を吐く」の結びの一節と、大正十四年以降の作品名を挙げるに止める。

『俺はこゝにゐたいんだがなあ、山をさがりたくはないなあ……』

自分は眼を開くのも退儀な気持で、斯う駄々子らしく枕元のおせいに呟いたが、ふと——くみかはしけり別れの酒を——あの好青年の残して行つて呉れた歌が頭に浮んで来て、自分はほゝ笑ましく温かい気持から、合はした瞼の熱

くなるのを覚えた。」

ここから、大正十四年以降の作品を挙げることにする。

先にも記したが「血を吐く」を冒頭としてである。

大正十四年

一月、「血を吐く」——『中央公論』

二月、「バカスカシ」——『改造』

三月、「霜枯れ作家の話」——『世紀』

四月、「死兇を産む」——『中央公論』

八月、「弱者」——『新潮』

大正十五年

一月、「われと遊ぶ子」——『中央公論』

二月、「もぐる」——『中央公論』

昭和二年

一月、「酔狂者の独白」——『新潮』

四月、「忌明」——『文芸春秋』

これだけ書いてはいたけれども、十四年以降の葛西は、心身ともに頹廢・衰弱が甚だしく、その点は、作品名そのものにも明らかである。十四年に世田谷三宿——當時は世田谷は東京市外であつた——に転じ、昭和三年に同じ世田

谷で一二番地から一一に転居したが、葛西の最晩年は三宿時代に他ならなかった。おせいは、十四年三月に三女ゆう子を生んだ。昭和に入つて、葛西最後の作「忌明」を発表した二年四月から約半年後の十月、胸部の疾患が悪化、神奈川県片瀬の鈴木療養所に入つて療養に努めた。この年十一月、弟勇藏が死去した。

昭和三年四月、おせいは四女久美子を生んだ。その四女の誕生から四ヶ月後の七月二十三日、葛西善藏は永眠した。明治二十年一月十六日から昭和三年七月二十三日、四十二歳の生が終つたのであった。何時か幸福が訪れるであろうという夢も、勿論消失し去つたのである。その夢こそ、葛西文学の底流に他ならなかったのである。

後記

昭和三年七月十日、葛西善藏全集第一巻が改造社より刊行された。七月二十三日に没した葛西の正に死の直前であった。この第一巻には、「哀しき父」から「家鴨のやうに」までの二十三篇が収められ、その冒頭に、次のような自序が掲げられている。

「序

恐らく、この貧弱な全集で、自分の作家的生涯もおしまひになるのかも知れぬ。が幸ひに健康回復して引続き第四巻第五巻と書いて行けるやうだとこの上無し、或は一編か二篇しか出来ないやうな場合には増版の時に追補して、兎に角纏つたものにはするつもりである。実際これが今更自分の全集——なんて、慚愧に堪へない次第なのであるが、切に読者諸君の御寛容を祈る。

昭和三年五月

著者「

この全集は装幀は平福百穂、題字は菅虎雄で、なかなか美しく出来上つた。そして第一巻は四百七十三頁、かなり厚い本となつた。しかし、自序に告げられた通り、作品は余り増さず、第三巻で全作品が盛られ、第四巻は感想・随筆・目録・作品批評・人物記の集録、第五巻は書簡集である。そういう全集の刊行されたうちで、生前に出たもののは第一巻だけ、第二巻は八月三日刊行であつた。第三巻は大分後の五年九月十日刊、作品集はこの第三巻で終つた。その第三巻の末尾には、「葛西善藏集の末尾に」と題して徳田秋声の短文が掲げられている。その冒頭を引くこととする。

「葛西善藏君四十二年の短生涯を記録する作品集に対して、自分は何を言つていゝかを知らない。君の芸術は人によつては殆んど信仰的に好きだし、人によつては又兎角の非難を加へるであらうが、これは君の生活並びにそこから入染出した芸術に一般性が乏しいといふことにもなるのだが、それだけに又特異性が多いといふことは誰も異存はないであらう。一体芸術は特殊なものであらうか。或ひはそれは単に芸術のスケールとか、作家の気品とかの問題であらうか。自分は迷はざるを得ない。」

葛西文学を考へる場合、これ等はいずれも有力な参考となるが、小生にとって何より有力な手引きとなつたのは、現代新書の第十三巻、谷崎精二の『放浪の作家』であつた。だから何回かこの書から引用したのである。そういう谷崎の書の「あとがき」で井伏鱒二は次のように告げている。結末の一節を引く。

「本文の『僧房生活』の終りのところを見ると、芥川龍之介の葬式の帰途葛西善藏を訪問した谷崎さんに、葛西善藏は、自殺は不自然だ、僕は東洋人らしく飽くまで天命に従つて生きる」と答へてゐる。これはほんの一例にすぎない、しかし、この評伝には同時代に親しく交際のあつた人

でなければ、知り得ず、従つてまた書けぬ、興趣に富む人間葛西善藏の逸話が多く収録されてゐて珍重すべき記録となつてゐる。

同時に、谷崎さんは葛西善藏の作品の秘密を究明されようとしてゐて甚だ興味深い、これは学者谷崎さんに加ふるに、作家谷崎さんがあつて始めて見事な実を結んだものと云へよう。更に云へば、葛西善藏を論ずる谷崎さんは、また谷崎さん自身の青春をも語つてをられるやうである。換言すれば、この評伝は一面では谷崎さんの青春の書と云へぬこともない。」

『放浪の作家』——昭和三十年十二月現代社より刊行されこの書の結末を引いて、引用の多いこの書の結末とする。未だ書くべきことは色々あると思うが、反自然主義者の小生にとって、自然派の中では、葛西善藏氏は最も近寄ることの出来た作家の一人であつたことを記して筆を置くこととする。

不 尽